プラトニック・ラブ

クフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プラトニック・ラブ

【Ｎコード】
Ｎ０６２５Ｒ

【作者名】
クフィ

【あらすじ】
私は、王女だ。つまり、王族だ。

父と母は政略結婚だった。
つまり、お互いに望まない結婚だった。

でも、母は違った。母は父を愛していた。
でも、父は母を愛していなかった。父が愛していたのは、別の女性だった。

母は、怒り狂って女性を殺した。それから父と結婚して、私が生まれた。

それでも、両親に『愛』はない。

そんな両親を持つ、変わった王女様の話。

人物紹介（前書き）

とりあえず、今まで出てきた方々をご紹介。
増えてきたら、またまとめ直します。

人物紹介

あなた様
ラヴェリア・シクザール（１６）
主人公。一応エウィルネダス国、第一王女。両親と一度も会ったことがない、蔑ろにされている子。今まで、乳母によって城の片隅で暮らしていた。
肉料理が嫌い、あとキノコも嫌い。
ハーブのお茶が大好き。
花の世話と散歩が趣味。

父（３０代）
ダンケルハイト王
ラヴェリアの父、エウィルネダス国の王。無関心、無表情で生きている。娘に会うつもりは一切ない。昔は、とても笑顔を見せていたらしい。

母（３０代）
エウィルネダス国の王妃。父のことを憎むほど愛している。狂愛している。
人から『魔女』と呼ばれていて、恐れられている。父の心を惹かれているものを今も壊している。

乳母
ラヴェリアを１６年間、育てた。その後、肺炎を患い、亡くなった。

ラヴェリアの金色の瞳に『あるお方』を見て、尚母の娘ということで恨んでいた。ラヴェリアを今までずっと『あるお方』に似せ続けた。

＊

テオリア・シクザール（４２）
シクザール家当主。侯爵。１６年前に妻がいて、妻は女の子を身ごもっていた。しかし２人は馬車の転落事故によって亡くなっている。笑顔の素敵なアラフォー。

フィリア（２７）
シクザール家に仕えている侍女の１人。実は、侍女長かもしれないと言われているが違う。ハキハキとした強い女性。ラヴェリアラブ。現在、ラヴェリア専属の侍女。

ペール（６７）
シクザール家に仕えている庭師。孫がいるらしい。何気に孫の嫁探しをしている。

リーク（２５）
厨房にいるので多分、料理人。フィリアとは仲がいい。よく殴られている。噂好きとの専らの評判。実は、ペールの孫。

ナジャ・ネフェロイ（２３）

ネフェロイ男爵の末娘。赤毛が特徴的な女性。
ラヴェリア専属の侍女。ラヴェリアに敵意を持っている。
テオリアの前妻、ソフィアの年が離れた妹。

ネピィオ
ラヴェリアの家庭教師。数多くの貴族令嬢を育ててきた大ベテラン。

＊

国王
グラナヴェート王（５０）
アメタトス国の国王。現在、病を患い、王太子に次の政権を託している。

王太子
デュラン・トゥム・レーギス・アメタトス（１７）
現在、国一番の注目の的になっている人物。婚約者を迎えると共に王位につく予定。

ルクス（２０）
王太子の従兄弟。右腕的存在。デュランのせいで胃痛に悩んでいる日々を送っている。

アスフォード
税務の総管轄者。何かと文句を言う男。

＊

ソフィア（２７）
ナジャの姉。ネフェロイ男爵の娘。テオリアとは心の底から愛し合っていた。１６年前に馬車の転落事故で亡くなった。

『あのお方』
ラヴェリアの乳母が慕っていた方。かつては父と愛し合っていたが、母に図られて八つ裂きに殺された。大貴族の娘だったが、その家は現在取り壊されている。一族もみな殺しされている。
美しい金色の瞳を持っていた。
物語の中心に座っている人。

『あなた様』

“あなたの両親は愛し合っていますか？”

その質問に私が答えるとしたらノーだ。
両親は政略結婚、つまりお互いに望まない結婚だった。
ここまで聞けば、ただ「ああ、そうなんですか。」と済まされる内容だ。だけど、私の両親は違った。

望まない結婚をしたのは、父だけだということだ。

母は恐ろしい人だ。娘の私が『魔女』と呼ぶほどにだ。

私は、所謂国の王女様だ。つまり、両親共々『王族』だ。そこから考えていいほどに両親の政略結婚は大いにあり得た話だった。

父は愛する人がいた。身分は、今は母によって潰されてしまった大貴族の一人娘だったそうだ。しかし、貴族といっても彼女は、そこの当主は血のつながりもなく、その女性はどこから来たか分からない人だった。しかし、美しい金色の瞳をしていたらしい。
父と女性の出会いは至ってシンプルだ。庭先で花に水をやっていた女性にただ、父が一目惚れをしたらしい。それから2人は人々から隠れるように逢い引きを重ねた。身分も王族と相応、2人の縁談もうまくいっていた。
しかし、母は違った。母は父を愛していた。
愛を知っていた母は、それをすぐに憎悪に変えた。そして、それは恐ろしいものに変えたのだ。
母はまず、父を図った。父の寝室に入り込み、彼に睡眠薬を飲ませ、

一晩過ごした。もちろん、ともに過ごしたかのように血も残した。初めての証を。
それからが母の復讐劇だった。そのことを知った父は絶望した、でも母は笑った。その頃、母は父と逢うことができない寂しさからある男性との間に肉体関係を持っていた。つまり、母は身ごもっていた。

その事を知ったみなは、それを父の“子”だと言った。父は否定した。でも受け入れられなかったそうだ。彼女との縁談は、無かったものになった。代わりに母との縁談が進んでいった。母は歓喜した。父を手に入れたからだ。しかし、父は嫌悪し、そして母から逃げた。

父は一度国外逃亡をした。勿論、彼女との駆け落ちだった。王は父を探した。当たり前だ、たった1人の跡継ぎだからだ。母も探した。血眼になって探して、探して、探して……ついに見つけた。父とその女性を。

そして、母は女性を父の前で八つ裂きにして殺した。

顔が分からなくなるまでに、憎しみを込めて。

それから、父は笑わなくなったそうだ。少なくとも、私が生まれてからは一度笑わない。
母は、父に尽くした。尽くして、尽くして、尽くしても父は笑わなかった。
そんな父のことを心配していた大貴族の当主が、母を父から遠ざけた。勿論、母怒り狂い、その貴族の家を焼き尽くした。そして、貴族の身内をみな殺した。

そのこともあってか、誰も母に逆らわなくなった。何かを母に言えば、次に殺されるのは自分たちだからだ。

それから彼らは母をこう呼ぶようになった。

――『魔女』と。

私がその後生まれた。生まれた私を父は嫌悪した、母は無関心だった。

私は母にとって、父を手に入れるだけに生み出された『道具』でしかなかった。それだけのことだった。

両親は私を一目も見たことがない。生まれてもう１６になるが、一度会ったことがなかった。私は、乳母に育てられ、そしてこの城の

片隅で生きている。

この話は、育ててくれた乳母によって聞かされたものだ。娘の私は、知っておくべきだと言っていた。乳母は泣きながら話していた。乳母は、彼女に仕えていたらしく、母を心の底から憎んでいた。

そんな彼女が何故、私の世話をしたのだろうか。疑問だった。

彼女は、言っていた。

「あなた様の瞳は、あのお方にあまりに似ているのです。私は、それだけの理由であなた様を育てました。死んでしまったあのお方と陛下の子を育てているように。」

何にも言えなかった。
乳母はこの話をした3日後、肺炎で亡くなった。彼女は悟っていたのかもしれない、話しておかなければと思ったのかもしれない。
この話を聞いた後に私は、侍女たちに話を聞いてみた。

「私とお母様は、似ていないの？」
「……はい、あまり似ているとは言えません。王妃様は妖美な女性です。あなた様は全く似てつかない方です。」

この返答に私は、驚かなかった。そうだったのか、と思った。
だから、彼女は私を育てられたのだ。あの憎たらしい母に似ていないのなら、気にしなくてもいいのだから。慕っていた人の子だと思えばいいのだから。
しかし、もう一つ疑問に思った。私の本当の父親だ。でも、母のことは一介の侍女に聞けても、このことは流石に聞けない。
仮にも私は、父の“子”。つまり、王女だからだ。色々と自分で調べたが、何も分からなかった。母のことだ、証拠を一つ残らずに殺した、または消したに違いない。
私は、父親のことは諦めた。
でも、父親を調べて今更だが、気づいたことがあった。

そう言えば、私には“名”がなかった。
私は、侍女たちから『あなた様』と呼ばれている。
両親は私に会っていない。私を名付けにも来なかったということだった。
無性に悲しかった。
侍女たちの家族の話を私は、よく聞かせてもらった。
嫌な父親だった、とか母は手芸が趣味だった、とかを色々聞いた。

羨ましかった、私には一つもないから。

みんな、名前を持っていた。両親からもらった大切な贈り物だ。

泣きたくなった。

ただの『名前』がないだけなのに。

いつも通り

泣きたくなった日から早、三週間も経った。あの日、私は結局泣かなかった。
泣いたところで両親が名前を付けてくれる訳でもない、むしろ侍女たちが困り果ててしまうだけだ。

私は部屋から出て、庭先を散歩していた。これは、私が生まれてからの習慣だった。
乳母はあの人を、彼女を一番慕っていた。彼女がしていたことを私に沢山、させたのだ。

――あのお方は、花がお好きでした。だから、花の苗を植えてみましょう。

――それはダメです、あなた様。あのお方は、肉類が嫌いでした。だから、肉ではなく魚をお食べください。

――誰ですか、このドレスを選んだのは。下げなさい。こちらの方が、似合います。だって、あなた様は――

『陛下とあのお方の“子”なのです。』

よく考えてみると、乳母は病んでいた。
私の何もかもを彼女がいい、慕っていた『あのお方』に似せようとした。
私は、それを自然と受け入れていた。私にとって乳母は、掛け替えのない存在だったからだ。乳母は喜んだ、あのお方に似ている私を。
しかし、乳母は私を一度も『あのお方』の名前で呼ばなかった。理

性で止めていたのだろう。似せようとしたところで、乳母の望む人は戻ってこないのだから。
それと同時に乳母は自分の名前を私に呼ばさなかった。これは、母に対する憎しみだろう。

乳母は本当に危ない状態だったのだ。
私は、あのお方の瞳を持っていて、そして乳母にとっては憎くて憎くては、怨みきれない母の子を育てることは。

そのことを気にしてか、私がいい人だね、と言う度に乳母は、苦い顔をしていたのはよく覚えている。

『あなた様、私は善人ではありません。偽善者です。』

『何で？』

『あなたを見ているようで、あなたを見ていませんわ。私は。』

『……誰を見てるの？』

『……あのお方をです。』

やっぱり、乳母はいい人だったのだ。
悔いていたのだ。幼い私を通して、あの人を見るのを。普通、偽善者ならそんなことを言うわけがない。笑って誤魔化したはずだ。
でも、乳母はしなかった。どこかで私に謝っていたのだから。

私は花壇へとたどり着いた。この花壇は乳母と私が一生懸命育てたものだ。これが完成したときは乳母は嬉しそうだった。涙を流していたからだ。
私は泣かなかった。

勿論、この趣味は『あのお方』のものだ。色とりどりの花はとても心を安らかにしてくれる。不思議なことに私はこの花たちがとても好きだった。もし、『あのお方』が生きていたら、趣味があったかもしれないな、と私は心の底で笑いながら思った。

実はこの花壇には父も通っている。
とは、言っても私は一度も会ったことがなかった。このことを教えてくれたのは、庭師だ。

―とても優しい瞳をしていました。

私は、心が踊った。
今まで無関心だった父が、感情を感じるようになったのだ。嬉しかった。

父にとってこの花壇は、安らぎの場所なのだろうと私は、思った。
この花壇は私と父を繋ぐ最後の橋だ。最後かもしれないチャンスを作ってくれるはずだ。私は、今日も丹念に花壇の世話をした。

でも、翌日すべて無くなってしまった。

「……」

「…あ、あなた様！申し訳ございません！……お、王妃様が燃やすように、と…」

「お母様が？」

「は、はい。」

灰しかなかった。
今まで暖かい色とりどりの花たちが迎えてくれたのに。
父が感心を持ったのに、乳母が大事にしていたのに。

私が『大切』だと思ったのに。

母は、魔女だった。

＊

あれから侍女たちに聞いた。母が父をつけていて、あの花壇を見つけたらしい。
嫉妬深い母のことだ、一瞬にして怒り狂っただろう。
夜に騎士たちに燃やしてこい、と命じてあの結果らしい。

父は何も言っていないらしい。無関心に戻ったようだ。
母には、庭師が植えたものだと伝えているらしい。つまり、私と乳母が育てたものと思ってない。

――安心してください、あなた様。

それでも、悲しかった。
私は三週間ぶりに悲しさを思い知った。
その日は、ただ椅子に座って空を見上げていた。

＊

あれから、一週間経った。一つ変わったことは、散歩の道先にあの花壇がないことだ。
父もあれから姿を見せていないらしい。いつも通り、国の政治を治めている。

母は、父の心を奪うものがなくなって満足したのか、いつも通りに各国の商人を呼んで、ドレスや宝石を買い漁っているらしい。

みんな、みんな、みんないつも通り。
私の日常だけ、変化した。
花を植えることは禁止された。母の命令だ。罰を受けた庭師も命は安全らしい。
母も殺すまでの極刑を与えなかった。喜ばしいのかは、また別の話だ。

花壇のところについた。黒い焼け跡が色濃く残っていた。私はそこに膝をついて、指で土をなぞった。

……ボロボロだった。
感触がいい、暖かい土はなかった。そこには灰と焦げた草花が混ざり合った不快なものだった。
私は、土をとり握った。
それでもその感触はなかった。

「……」

私は、“初めて”泣いた。
思い出が、全て頭の中に蘇ってきた。乳母は、笑うことが少なかった。笑わせようと私は、努力した。でも、乳母は笑わなかった。

しかし、乳母は笑った。この花壇ができてからだ。嬉しそうに語ったのだ。あの頃を、父もあのお方も生きていた、この城が平和だった時を。

私の中に何かが駆け巡った。
何とも言えない、感情が。今まで1回も感じることも思うことも出来なかったものが。

涙が着ていたドレスを汚した。でも、ドレスは既に汚れている。もう枯れ果てた土の黒いシミがつき、広がっている。

突然頭痛が襲ってきた。
私は頭を抱えた。

―痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ！！

痛みが私を包んでいく。涙が顔を濡らしていった。私の悲しさを哀れに思ったのか、空も一緒に泣き出した。頬を濡らす水が増していった。

私の中で、何かが弾けた。

世界は、真っ白で真っ黒で、残酷だ。

知らない屋敷

目が覚めると、まず見えたのは暖かい色合いの天井だった。

身体を起こそうとすると、全身が痛み出した。ギシギシと音を鳴りだしそうな身体を、私は気力で起き上がらせた。起きあがると、見えたのは私を柔らかく包み込む真っ白なシーツだ。お日様の匂いがして、気持ちよかった。

私の部屋かと思い、辺り見渡していると全然違ったものだった。

ここはどこだろうかと思っていると、扉が音を立てながら開いた。現れた人物は、起き上がっている私を見ると、大きい瞳を更に広げて、慌てながら近寄ってきた。

「お目覚めになったのですね、良かったです！」

「あ、ここは…？」

「あ、申し訳ございません。ここは、シクザール侯爵の御屋敷の客間でございます。旦那様があなたを道で拾ったらしく、慌てて帰ってこられました。」

「シクザール……？」

可笑しい、聞いたことがない家名だ。
私は仮にも“国”の王女だったのだ。一応、国の貴族の家名は知っている。
…夜会などには、一度も行ったことがないが。
貴族、しかも『侯爵』なら必ず、王族の耳にも入るはずのものだ。
聞いたことがない、ということで済む問題ではない。

「え、えっと…」

「すぐに手当てをしたので、大丈夫のようですね。しかし、お医者様は暫くは安静になさるように言ってらっしゃったので、ベットの上で我慢して下さい！」

「は、はい…」

どうやら、私に拒否権はないようだった。侍女にしては、ハキハキとしている彼女に私は、着替えやら食事などをされるがままの状態で受けた。
これについては、城に居たときも偶にあったことだった。特に何も問題はなかった。
しばらくしていると侍女は、「旦那様を呼んできますね。」と言って部屋を出て行った。

私は、漸く落ち着けるようだと思い、溜め息をついた。あのタイプの侍女は、少なくも母が支配している城の中では見なかった。母は、ああいう性格は嫌いらしい。だから、１人もいなかった。だから、彼女は私にとってとても新鮮に感じることができた。

何だか、変な感じもしたが。
それは彼女を侮辱しているようなので、すぐにその考えを私は、捨てた。

そんな事を考えている間に、どうやら『旦那様』が来たようだった。扉が開いた先にいたのは、先程の彼女を連れたとても『怖そうな』人だった。

年齢は、私の父より年上だろう。確か父はまだ３０代前半だった。母も同じ年くらいだと聞いていた。
私の目の前にいる旦那様は、４０代をゆうに越えているだろう。厳格さを隠さず体現している雰囲気はとても３０代には見えない。侍女の彼女はそんな旦那様の後ろでニコニコしている。肝が据わっているようだ。

「身体の調子はどうだね？…屋敷の前に倒れていたんだ。死んでいるかと思ったよ。」

「あ、大丈夫です。あの屋敷の前に倒れていたって…」

「ん…？覚えていないのか？屋敷の前で雨も降っていないのにずぶ濡れで倒れていた。」

「……」

怖そうな外見からは想像出来ない、優しい声に私はまず、驚いた。乳母には『人を外見で判断するな』、と教えられてきたが、それをとても感じた。

そして、もうひとつは、

――屋敷の前に倒れていた。

そこからおかしかった。私は、城にいたはずだ。父も母も知っているか分からない、城の片隅にだ。
私が倒れていたのは、その片隅のまた片隅にある花壇のところだ。
決して貴族の屋敷の前に倒れているはずもないのだ。

有り得ない、有り得ない、有り得ない。

今起きていることが、私は何が何だか分からなくなっている。

ただ1つ分かること、それは。

私の宝物を奪った、母――『魔女』がいない、安らかな場所に私は今居るということだ。

「大丈夫かい？顔色が悪いようだが……？」

「っ、…大丈夫です。…ちょっと頭が混乱してて…」

「もしかして、記憶喪失かい？」

私はそれを聞いて、今まで俯せていた顔を勢いよく上げた。私は、違うと否定したかったが、どうやら旦那様は逆にそれを判断したらしく、弁明の余地もなく黙らされた。

「…そうだったのか、それは辛いな。」

「い、いえ。あ、あのちがっ……」

「安心したまえ、君を放り出したりはしない。記憶が戻るまで此処にいるといい。」

そう言った旦那様は、「任せたぞ」と侍女の彼女に告げて、出て行ってしまった。彼女は彼女でとても輝いた瞳をこちらに向けていた。どうやら、本気で記憶喪失だと思っているらしい。にっこり、と音がつくような笑顔を見せている。

「お嬢様、お名前は覚えてらっしゃいますか！？」

「あ、あの私、名前はなくてっ……」

「まあ、そうなのですかっ！？お名前まで忘れてしまわれたのですね…」

「い、いや。違うのっ…元からなっ」

「そんなに健気な姿を見せられては、私は心を痛んでしまいますわっ！！」

そう言って彼女は、両手で顔を覆いながら、泣き崩れてしまった。

……負けてしまった、と思った。

口では彼女には勝てない。
話す前に自己解決されてしまうからだ。会話を苦手としている私にとっては、彼女は天敵すぎる。無理だ。

仕方がない、記憶喪失ということにしておくことにした。その方が逆に安心できる。
此処は、私が知らない貴族の屋敷だ。仮にも“王女”だと言えば、何をされるかは分からない。
それに、私はまだ生きていたいのだ。死にたくないのだ。

浅はかな哀れな私はまだ未だに望んでいるのだ。

乳母との思い出を取り戻すことを、父との会話を望んでいるのだ。

こんな所では、死ねない。

産声

あれから何時間か経った。
侍女である彼女の名前は、『フィリア』というらしい。
私が呼ぶと瞳を輝かせて「何でございますかっ！？お嬢様！」と言って迫ってくる。

怖いから止めて欲しいと思った。

旦那様は仕事の途中だったらしく、執務室に戻って仕事を片づけているそうだ。食事のときにまた会いに来る、とフィリアは言っていた。

つまり、これが意味していることは…

「お嬢様、此方のドレスは如何ですか？」

「……」

「そんなに気になさらなくてよいですよ？旦那様は此処を開けて見せてあげなさい、と申していらっしゃってますから！」

ドレス選び、だ。
私は正直、ドレスなどに感心を持っていない。着てみようが誰かに見せるわけではないので、幼い頃から興味を持たなかった。加えて、乳母のこともあったので、私は毎日着せ替え人形になっていた。
着せ替えの後は、乳母の望む『あのお方』になっているので、乳母は大変喜んでいた。
つまり、私には服なんてどうでもいいと思っている人間なのだ。選べ、と言っても無理すぎるお願いだ。
しかし、いつまでもこの病人のような白いワンピースを着ている訳にもいかなかった。しかも先程は、この格好で旦那様と会っていたのだ。恥知らずにも程があるのだ。
そんな私の心の葛藤など知らないフィリアは、私がまた健気な姿を見せていると思っているようで、また大きな瞳に涙を浮かべていた。
いくらなんでも、泣きすぎだと思った。

とりあえず私は、衣装室に沢山入っているドレスの中から手前に取りやすくあった薄い水色のドレスを取った。特に派手な装飾はついていないので、私はこれにした。

因みにこのセンスは、私の個人ではなく『あのお方』のものだ。乳母から沢山、言い聞かされたのだ。

――『あのお方』は、派手好きではありませんでした。だからあなた様、あなた様もこれを着るように。

そう言って渡されたのは、この水色のドレスのような感じのものばかりであった。

私は手に取った後、すぐに着替えた。この行動には流石のフィリアも驚いた様子だった。一介の淑女としてありまじき姿だろう。しかし、此処での私は『記憶喪失』の人間だ。関係ない。

城では沢山の侍女が、服を着替えるときに手伝ってきた。私は煩わしかったのを覚えている。だから、偶に1人で着替えると怒られた。淑女がすることではない、と。

やはり、侍女はどこにいっても変わらないようだった。

「お嬢様、なりません！一介の淑女がそのようなことをなされては、恥知らずでございます！」

「でも、1人で着替えるから……」

「“でも”では、ありません！僭越ながら、このフィリア。手伝わせていただきます。」

そう言ってからのフィリアの行動は、とても早かった。一瞬にして私の手にあったドレスは奪われ、私はコルセットをつれられ、ドレスを着ていた。

そして、いつも無造作に流している髪に櫛を通して、あっという間に私の髪は結られていた。

その調子で化粧もされていき、すぐに終わっていた。

終わった自分を鏡で見ていると、まるで違う人間がそこにいるようだった。化粧もされたのも髪を結ったのも初めてだった。城にいた私は、いてもいなくて同然の扱いだ。夜会などには一生いかないだろうし、かと言って父と母に会うこともない。だから、こうしたことは何一つ知らない。

でも、少しだけだが綺麗な格好が好きになった。

「綺麗ですわ、お嬢様！やはり、元もお美しいので更に映えますね！！」

「いや、私は…美しくはないから。フィリアのお蔭だよ、ありがとう。」

「…っ！！お嬢様っ！？」

「……？」

私は嬉しかったから、フィリアにお礼を言った。少しは笑えた、と思った。でもフィリアの様子を見ると、どこか違うようで、また両手で顔を覆いながら、また泣き崩れてしまった。

「お嬢様ぁぁぁっ！！」

「……フィリア？」

「うっうぅ…その健気なお姿を見せられては、私はまた泣いてしまいそうです！」

――もう、泣いているよ。

私は言葉には出さなかったが、心の底で思った。
でも、私はそんなフィリアの様子を嫌いにならなかった。寧ろ、大好きになっていた。
城には、こんなに行動一つ一つに感心を持ってくれる人は居なかったから。乳母は見てくれた、でもそれは違うものだった。

乳母の前では、私は『あのお方』の仮面を被っていたから。乳母を笑わせようとしていたから。
でも、フィリアは素の私を見ていてくれる。それが、嬉しかった。

＊

それから、フィリアに色々話を聞いた。国のことだ。父が治めている国を私は、一度知りたかった。
私に家庭教師は居なかった。私に父は国を治めてほしいとは何一つ思っていなかった。だから、家庭教師は居なかった。
では誰が次に国を誰が治めるのか――父は代わりに貴族の子息を跡継ぎにするつもりだろう、と乳母や侍女たちは言っていた。私は、悲しかったのを覚えている。
フィリアに聞くと、今は王太子の婚約者を決めるのに国中が騒がしく、貴族の娘たちの中では、毎日火花が飛んでいるらしい。…怖かったから、余り聞かなかった。
しかし、この話の中に私の記憶と明らかに違うことがあった。王太子の話は良かった。私の代わりの子だと思っていたから。でも、王は違う。

「現在、国王陛下は病を患い、大変な状態です。国のことは王太子殿下が治めている状態と言っても過言ではございません。だから、王太子殿下の婚約者が決まった時には――王太子殿下がこの国の王になるでしょう。」

私の父は、生きている。健康で病を患ってなどいない。それは確かだ、とは言えないが、流石に蔑ろにされている“王女”にも聞かされるはずのことだ。

――おかしい。

それしか言えなかった。

嫌な汗をかいてきた。背中にも手にも全身にかいていた。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ、と本能が告げている。それでも聞くしかなかった、私にはそれしかなかったからだ。

私の勘が正しければ、ここは“違う”のだ。

ここは私の父――“ダンケルハイト王”がいないかもしれない。

そして私の国――“エウィルネダス”ではないかもしれないのだ。

「ねぇ、フィリア。」

「何でございますか？」

「……この国の名前は？国王陛下の名前は？」

ねぇ、嘘だといって、

「この国の名前は“アメタトス”、国王陛下のお名前は“グラナヴェート”陛下ですわ、お嬢様。」

私は、頭が真っ白になるのを感じた。

＊

あれから私は、フィリア何も質問しなかった。彼女は私の様子を察したようで、何も言わなかった。ただ傍にいて、お茶を入れてくれた。ハーブのお茶だった、私が好きだと主張することが出来るものだ。

私は最初は下げるようにお願いした。好きなものでも今は、とてもじゃないが飲む気にはならなかったからだ。でも、フィリアは下げる素振りを見せなかった。
段々と私は居心地が悪くなった。暫く経ってから躊躇いながらも、コップに口をつけた。

…おいしかった。

フィリアはそんな様子をただ、嫌な顔を一つも見せずに笑顔だった。

それから旦那様との食事までの時間は、ゆっくり過ぎていった。私は椅子に座って、窓の外に見えた庭を見ていた。驚いたのは、そこに見えたのは乳母が慕っていた『あのお方』の趣味の花たちだった。私は、少し気持ちが軽くなった。母に奪われてしまったものだったから。あんなちんけな花壇と一緒にしてはいけない立派な庭だが、私には同じものが広がっているように見えた。

「気分はどうだい？大した話もできなくてすまない。少し仕事が溜まっていたんだ。」

「いえ、大丈夫です。それよりすみません…っ気を使わしたようで…」

「いや、構わないよ。それよりフィリアは凄いだろう。彼女は押しが強くてね、その様子だとやられたようだね。」

「……」

ごもっともだった。

そんな風に言われている渦中の当人であるフィリアは、私の後ろにいてニコニコしている。やっぱり、彼女はとても強い人だと思った。肝が据わっている。

旦那様はハハハハッ、と笑っていた。此方も肝が据わっている。なかなか怖い図だった。

私と旦那様の前には、豪華な食事が広がっていた。私に気を使わしたようで、私が嫌いだと言った肉類を使った料理は一切なかった。代わりに魚料理が沢山あった。
この様子に申し訳なくなった。旦那様は肉料理がお好きかもしれないからだ。私は謝った。
そんな私の謝罪に少し目を開いて旦那様は、驚いていた。でも、すぐに笑って「気にしなくてもいい」と言ってくれた。

少し、心が暖かくなった。

それから、私の記憶の話となった。
私が言えたのは、恐らくこの国の出身ではない。身内がいないということだ。そして、名前を含めた一切の自分のことは分からないということだ。
私は嘘をつくのに慣れていない。今まで嘘をつくような生活をしていなかったから。
旦那様は私の話を聞くと、とても悲しい顔をしていた。
私は申し訳なくなった。嘘をついているから。

流石に名前がないと不憫だと、旦那様は言った。しかし、私に“名前”という概念はないから、少し疑問に思った。
“名前”はそんなに大切なのか、なくてはならないものか、と。
私の両親は私に贈ってくれなかったものだ。普通の人間なら、受け取ることが出来るものを私は出来なかった。

1ヶ月前は悲しかった、でも割り切れた。
――何で名前は必要なんだろう？
今の私には分からなかった。

「…――『ラヴェリア』。」
「えっ、…？」
「君の名前だよ。まあ、名前は私の亡くなった娘の物になるはずだったものだが…」
「……」
「嫌かい？」
「いえ、嬉しいです！」

私は、笑顔見せた。嬉しかった。

旦那様も笑って、フィリアも笑った。

しかし、私はすぐに顔を曇らせた。原因は旦那様が言っていたことだ。

旦那様は、娘と妻を１６年前に馬車の転落事故で亡くしたと言った。そんな大切なものを私は、貰うわけにはいかなかった。私は断った。そしたら、悲しい顔をされた。

「やはり、嫌だったかい？私は君を娘の代わりにしているわけではないんだ…」

「い、嫌な訳ではないんですっ！大切なものをこんな私に贈るなんて……」

「そんなに自分を卑下するんじゃない、君は綺麗な子だよ。今時、

居ないんじゃないかっていうくらいね。だから、私は君に名前を上げた。ダメかい？」

「……」

私は泣きそうな顔をして旦那様を見つめた。優しい顔で笑って、私に返してきた。

私は旦那様の好意に嬉しくて嬉しくて、嬉しいのに涙が出てきた。泣き始めた私に旦那様とフィリアは、呆れた顔もせずにただ笑っていた。フィリアは、布を持ってきて私の頬に流れていた涙を優しく拭いてくれた。益々、私は嬉しくなった。

私は泣きながら、首が取れるんじゃないかというぐらい縦に振った。目の前の旦那様は、微笑みながら頷いていた。

嬉しい嬉しい嬉しい、嬉しい！！
さっきまで考えていたことが一気に馬鹿馬鹿しくなった。

今日は一番、悲しい日だった。
―母に思い出を焼かれてしまったから。

今日は一番、嬉しかった日だった。
―“名前”を貰ったから。

そして、『ラヴェリア』は初めて世界に産声を上げた。

敵意の眼差し

私――『ラヴェリア』が、屋敷で来てから過ごして早、二週間も経とうとしていた。
フィリアは今では私の専属の侍女になっていた。しかし、フィリア１人だけでなく、私と同い年くらいの『ナジャ』という女の子も一緒だった。

ナジャは、あんまり私のことが好きではないらしく、いつも俯いていた。最初は気分でも悪いのか、と心配して顔を覗きこんだが、すぐに身を引いて私から離れていった。そして、お茶を用意します、と小さく言って、足早に部屋から出て行った。

フィリアは『照れているだけですよ。』、と言っていた。『そんなのかな』と言ったが、フィリアが『そうなのですっ！』と確かにそうかもしれない、と私は思うしかなかった。

この屋敷には、旦那様しかいない。１６年前までは奥様もいた。そしてお腹の中には娘さんがいた。しかし、２人は亡くっている。女性、というか女の私を世話をするのは、慣れていないだけだと私は言いきかせた。

しかし、ナジャは私を避け続けた。
いくら話しかけても何も答えずに頭を下げるだけだった。フィリアも何か言ったらしいが、ナジャの態度は変わらなかった。

私は、悲しくなった。

＊

他の使用人たちもナジャと一緒なのか、と言われると、それは違った。寧ろ逆だった。

いきなり現れた“怪しい”としか言えない私を屋敷の使用人たちは、優しく受け入れてくれた。中でも私が庭を絶賛したためか、庭師のペールさんは、とても優しかった。

ペールさんは、私に知らなかった花の名前を沢山教えてくれた。

――孫が1人増えたみたいだ、とペールさんは言っていた。

ペールさんの孫ならとても幸せだと言ったら、彼は『なら、孫の嫁

になって欲しいかぎりです。』と笑っていった。
私は少し驚いていたが、丁重にお断りをした。そんな真面目な私の返答に彼は、びっくりしていた。そして、冗談ですよ、と言っていた。

…驚いて損をした。

＊

「どうやら、調子はいいようだね、ラヴェリア。」

「あ、旦那様。」

「いつも『お父様』でいい、と言っているのに。」

「……それは、ちょっと。あ、でも旦那様と呼んだのは、ごめんなさい。テオリア様。」

「呼んでくれないのかい？」

「……」

「テオリア様、ラヴェリア様を困らせないで下さい。」

旦那様、『テオリア』様は私をとても可愛がってくれた。今はいない娘さんの代わりじゃないんだ、と彼は言っていたけど、私はそれでもいいと思った。

テオリア様は優しい人だ、大らかで使用人たちからとても慕われている。そして、こんな私に大切なものをくれた。

私は恩返しをしたいと思った。

こんなちっぽけな私が返せる恩なんてたかが、しれている。でも彼

が喜んでくれるなら何でもいい、と思った。

「……『お父様』、ありがとうございます。」

「っ！…あぁ、どう致しまして。ラヴェリア。」

本当の家族には成れないが、これぐらいは出来る。
彼の娘になるのだ。そしたら、彼は喜んでくれるはずだ。
でも、これは私の自己満足でもある。偽りでもいい家族の愛が、父親の愛情が、私は欲しくて欲しくて、堪らないのだ。

……私は、やはり醜くて汚いのだ。

――穢らわしい、汚い、母（魔女）の娘なのだと思った。

＊

ナジャが今日初めて喋った。

「旦那様に、テオリア様に近付かないで。」

「えっ…」

「聞こえないの？マヌケね。何でアンタなんか拾われてきたんだろ。」

「…っ……」

「はぁ、嫌な子だな。ホントに。下心が丸見えなのよ、泥棒猫。」

「どれだけ頑張ってもアンタなんか、テオリア様の家族になんか馴れやしなのよ。」

ある日の昼下がりだった。
フィリアは珍しく街の市場に用事があるらしくて、部屋には私とナジャしかいなかった。いつも通り、ナジャは何も喋らなかった。私は、少しばかり寂しくなったが、テオリア様――お父様に貰った本を読んでいた。しかし、お父様と私は親子ではないかというぐらい本の趣味があっていた。
この作家もこの詩家もどれも知っているものばかりだった。

私は嬉しくなった。血の繋がりはなくても、何処かでお父様と私は似ているんだと思った。

そう思っていると、ナジャが近付いてきた。初めてだった、ナジャがこんなに傍にいるのは。何か喋るかと思ったが、何も言わない。
私は首を傾げて不思議そうに彼女を見たが、それでも何も言わない。
彼女は私の目の前で立ち止まったままだった。

非常に困った。
何か話すべきかと私は口を開こうとした。しかし、それは音も出すことが出来ず終わった。

天罰だったのか、何なのかは分からなかった。ただ浅はかな私の考えを読み取ったかのようにナジャは喋った。

ナジャは、堂々としていた。普段見ていた態度が嘘みたいだった。そして、強い瞳を持っていた。

私は、怯えた。ナジャが見せたのは明らかな『敵意』だったからだ。初めてだった、こんなものは。

何も言わない私に満足したかのように、ナジャは鼻で笑った。

ナジャは続いた。

「“記憶喪失”？都合がいい設定ね。どうせアンタ、『平民』の娘でしょ。」

「テオリア様がお優しいからって調子に乗らないで。彼が愛しているのは、今尚１６年前に亡くなられた“奥様”なの。」

「薄汚いアンタより千倍も綺麗な方なの。『あの方』の後釜、後妻になんかアンタはなれないわよ。」

“後妻”……？

私はそんなものになるつもりはなかった。ただ、お父様の家族―“娘”になれたらいいだけだ。しかし、都合よく現れた私をナジャはそう見ていたようだ。だから、嫌った。遠ざけて、ようやく言うチャンスを得たみたいだった。

私からナジャを見ると、輝いていた。『あのお方』――ナジャは奥様をそう言っているが、それは不思議と乳母に私は重ねてしまった。

いいな、私もなってみたい。

愚かな私はそう思った。亡くなっても誰かに愛されている誰かになりたいと、思った。その人が輝いて、美しく見えるから。

「……いいな。羨ましい。」

「はあ？何言ってるのよ、アンタ。いいかげっ……」

「ナジャに其処まで思われている奥様は、とっても綺麗な人なんだね。幸せだったんだね。」

それを言った後に、ナジャは一瞬泣きそうな顔をして、私をキッと睨みつけて部屋から出て行った。私は1人になって、ちょっぴり寂しくなった。
私は、溜め息をついた。少しテーブルの上を見ると、ナジャが淹れてくれたハーブのお茶があった。
コップを手に取り、それを飲んでみた。

……少し、しょっぱい味がした。

＊

「ただいま。ほら、リーク。買ってきたわよ。」

「おぉ、さんきゅ。済まないな、お嬢様の世話があるのに。」

「悪いと思っているの？なら、私に美味しいお菓子を腕を振るって作りなさい。あ、勿論ラヴェリア様の分もよ。」

「へーへー」

――全く、人使いが荒いんだから。この人は。

私は心の中で思った。

しかし、すぐに不味いことになっていないか心配になってきた。
心配というのは、最近御屋敷にやってきた謎の美少女――否、目に入れても痛くないほど美しさを持った女性、ラヴェリア様と最近やってきた侍女、ナジャのことだった。
ラヴェリア様は記憶喪失になってらっしゃる方。いつも私は健気に振る舞っていらっしゃるその姿に涙を流してしまいますわ。本当に。
私を含めた使用人たちは、彼女に心を許しているが、ナジャは違った。
ナジャは明らかにラヴェリア様に敵意を持っていた。そんな事ぐらい旦那様も気づいていた筈だった。なのに…

『宜しいのですか、旦那様?』

『あぁ、ナジャをラヴェリアの世話係にする。フィリア、宜しく頼んだよ。』

『……分かりましたわ。』

全くあのサド……っ旦那様は、決定したのだ。私に面倒なことを押しつけてきたわね、と思いました。訴えてやろかと思いました。お給料がいいので、踏み止まりしましたが。

つまり、私が今此処にいることはナジャとラヴェリア様が部屋で2人っきりなのだ。非常に不味いことになってしまっている。何もなければ、いいのだけれどと思うが、やっぱり心配になってきた。私はリークのお菓子が出来るのを待つことが出来ず、部屋に向かっていった。扉を前にして、私って心配症なのかと思った。

先程、リークが言っていたのだ。昔はそんなこと一ミリも気にしないような性格だったのにな、と言ってきた。

何となく失礼なことを言われた気がするので、殴っておいた。

え、淑女のことは？気にしたらダメですわよ、人間。

えぇい、行くわよフィリア！

ヤキになって扉を開けた。

扉の先にいたのは、泣きながら恐らくナジャが淹れたのだろうと思われているお茶を飲んでいるラヴェリア様だった。

私は叫んだ。

「ラヴェリア様ぁぁぁぁっ！！」

「うっ……フィリア？」

可愛いから、その状態で首を傾げないで下さい。ラヴェリア様。

知りたい人

あの昼下がり以来、私はナジャを見なかった。もう実家に帰ったとか、仕事をサボっている訳ではないようだ。
今は、厨房で働いているらしい。かと言って、まだ私の専属侍女を辞めらされたということもないらしい。
ただ、今は私と距離を置いているというより、もう1人の侍女であるフィリアによってこの状態は作られていた。

私はナジャに謝らなければならないと、思った。そして、弁解したかった。あの時、私が言わなくても奥様は充分に幸せな人だ。私みたいな劣化した人間が、言っていいことなんてない。ナジャは誇りが傷ついた筈だ。申し訳がなかった。

フィリアに会わせてくれと言った。フィリアは少し険しい顔で言った。

――なりません、と。

いくらお願いしても無駄だったので、黙って厨房に行こうとした。
でも、フィリアは勘が鋭い。すぐにバレて、部屋に逆戻りさせられた。
そんな事が何日も続いた。

＊

今は私は、厨房にいた。ナジャに会いたかったからだ。
どうやって抜け出したかというと、ペールさんに手伝って貰った。
ペールさんはフィリアと私のやりとりをずっと見ていたらしい。流石に見かねたペールさんは、私を助けてくれた。

まず中庭でフィリアと散歩をしていた。そこでペールさんに会って話した。ペールさんは私たちに珍しい花が咲いたから、見てみないかと言う。私は、喜んでそこへ走っていく、フィリアに捕まらないように。フィリアは不意をつかれたので、私を捕まえられなかった。そのフィリアは今、ペールさんに捕まっているという感じだ。

フィリアは強いので、長くは保たない。早くしなければ、と思い、厨房に入ろうとした。厨房の扉を少し開けると、ナジャがいた。私は近づこうとしたが、ナジャは誰かと話していた。

相手は、お父様だった。

「どうだい、ナジャ？屋敷の暮らしは馴れたかね？」

「ありがとうございます、テオリア様。勿体無い言葉です。」

「いいんだよ、君は亡くなったソフィアの“妹”なんだ。私にとっても大事な“妹”だよ。」

「…っはい。」

傷ついた顔をしていた。苦しそうな、辛そうな顔だった。

このままいてもどうしようもないと思った私は、すぐに厨房から逃げ出した。幸いにも2人は私に気づかなかった。

ナジャはとても綺麗な笑顔でお父様に応えていたが、辛そうだった。何があるんだろう、と思った。彼女が私に言ったことと何か関係あるのだろうか。

私には、分からなかった。

それから私は、鬼のような形相をした怖い雰囲気を出したフィリアに捕まった。すかさず、お説教をされた。やっぱり、厨房に行ったことはバレていて、ナジャに会ったのかと聞いてきた。

私は、会わなかったと言った。見なかったとも言った。

フィリアは安心していた。もう、フィリアの怒った顔を見たくないと思った。
夢に出てきそうだったからだ。

＊

あれから、三週間。
私は、ナジャの顔を思い出していた。ナジャはまだ、私の侍女に戻っていない。今は、洗濯係の所で働いているらしい。
私は、ナジャのことを知ろうと思った。私の中では、あの出来事が鮮明に残っていたからだ。
まずナジャと話さなくては、と思ったが、それは無理だ。フィリアが怒る。

では、せめてナジャのことを知っている人から何か聞けないかと思った。
私は分からなかったから、ペールさんに相談してみた。

「ナジャと仲がいい方ですか？……うーん、私は庭師ですから。侍女たちのことはあまり知らないのです。お役に立てなくて申し訳ありません。」

「あ、…っいいの！ペールさんは、悪くないわ。私が、直接話が出来ればいいのだけだがら。」

「それはフィリアが許さないでしょう。今度こそ、雷が落ちますぞ。」

「そうっ……だよね。」

想像はしたくない。フィリアは怖い。

ペールさんは誰か居ないものかと考えているようで、花の苗を植える作業を一時中断していた。お仕事の途中なのに、と思った。私は図々しいのだ。

だから、ナジャが嫌いになって、あんな事を言って来たのかもしれない。お父様に図々しくも“家族”になって欲しいと思ったから。腹立たしい筈だ。

あの時言っていたことが本当なのだとしたら、尚更だ。
お父様の奥様――『ソフィア』様は、ナジャの姉だったのだ。
本当の意味で血の繋がりがある自分を差し置いて、私が家族になろうとしたことが原因なのだ、きっと。

私も嫌だったからだ。
父は私を跡継ぎに選ばなかった。いや、選ぶもなにも選択肢がなかったんだと思った。私は、母としか血の繋がりはない。父にとって忌々しいだけの母の子だ。
私とは家族にならないが、その子とは父は家族になるのだ。私が未だに望んでいる家族にその子がなるのだ。

悲しかった。
最近は、悲しくなったり寂しくなったり、泣いたりと私の感情は忙しく働いている。こんなにも働いてくれるなら、もっと役に立つことに働いて欲しいと思った。

「ラヴェリア様。私に1人だけですが、心当たりがいます。」

「本当っ！？」

「えぇ、この屋敷一番の噂好きのことを私は、すっかり忘れていましたよ。」

「誰ですか？」

「――私の孫です。」

まさかのペールさんの孫だった。

魔女に、なる

「ラヴェリア様、どうだい？俺が腕を振るって作ったケーキのお味は？」

「…っ…凄く、美味しいです！いつもの食後に出てくるデザートはあなたが、作っていたんですね。」

「んーまぁ。一応、シクザール家のパティシエですから。」

ペールさんのお孫さんは、シクザール家のパティシエさんでした。
彼が作ってくれたデザートは、とても美味しかった。
どうして彼が腕を振るって私のためにデザートを作るようなことになっているのかは、朝に遡る。

＊

あの後、すぐにお孫さんの所に行こうとしたが、ペールさんに止められた。どうやら今は、お城である今一番の噂になっている王太子殿下の婚約者のパーティーで、食べてもらうデザートを試作中、だと言っていた。

パーティーは今から4ヶ月も先らしいが、ペールさんによると、お孫さんは完璧主義者らしく、納得出来るものができないかぎり止めないらしい。
つまり、今はかなり集中しているから、話に何て付き合って貰えないということだった。

そのパーティーには国王両陛下も参加する。運が良ければ、城の厨房に行けるかもしれない。
つまり料理人――彼はパティシエだが、今一番の腕の見せどころら

しい。

忙しいなら、仕方がないと思った。
私以外の人は、忙しく働いているのだ。私だけ、お邪魔虫になっているのだ。
今日は諦めた。
ペールさんが明日、会えるように伝えておくよ、と言って私とは別れた。

そして、朝になった。

朝はいつも大変だ。
大変だというのは、私はいつもは乳母が選んでいたドレスを毎日身に付けていた。

だから、前にも言ったようにドレス選びなんて、興味がない。まずもって、衣服に興味がなかった。

しかし、シクザール家に来てからは違った。フィリアは私が選ぶドレスを見たいらしく、私がお願いして見繕って貰おうとしても無駄だった。

普通は、喜んでしてくれるものなのに。

私はフィリアのことが分からなかった。私が興味を示すものに喜んでくれて、私が楽しいと思ったものに一緒に笑ってくれた。

心が安らいだ。

乳母とは感じられなかった心地よさがあった。

今日はお孫さんに会うために急いでいたから、適当に淡いピンクのドレスを着た。

流石にメイクなどはフィリアのお任せだ。楽しそうにやってくれた。

…ナジャともこんな風になれるかな？

私は淡い期待をしていた。
フィリアみたいに笑ってくれたりはしてくれないか、と思った。
でも、ナジャにとって私は、『嫌いな奴』だ。無理かもしれない。
寧ろ、私が何とかして接触してくることを警戒しているのだ。だから、フィリアとも手を組んで、一切私と目を合わそうとしていないのだ。そうかもしれない、と思った。

じゃあ、私が一生懸命弁解しようとしていることは、ナジャにとっては迷惑なのかもしれない。
私と何かと会いたくないのだ、きっと。

心の底でそう思いながらも、ナジャと話をしたい私は、お孫さんのいる厨房に向かった。

＊

厨房に来るのは、これで2回目だ。
あの時は、もう昼下がりだったので、仕事を終えた料理人たちは、みんな食事をしていたみたいだった。そのため、厨房には後片付けをしているナジャだけいたらしい。そして、同じように仕事を一時片付けたお父様が、ナジャと話をしていたというのが、昨日私が出くわした場面だった。

これは因みに、フィリアが言っていた。彼女は同僚の侍女たちから聞いたみたいで、私が出くわしたな、と睨んだらしい。そして、バレてしまった。
今日のことも言った。流石に眉間に皺を寄せていた。でも、フィリアは行かせてくれた。

厨房は普段たくさん人がいると、フィリア言っていた。
ここでは、使用人たちからお父様までの大勢の食事を作っているらしい。
私は、あまりたくさん人がいる場所が嫌いだから、緊張していた。
厨房にたどり着くと、先程食べた朝食の匂いがした。どうやら、大分人が出ているみたいだ。
私は好機だと思い、扉を思いっ切り開けた。

中には、唸っている男の人が1人しか居なかった。

私は驚いた。
いくらなんでも人がこんなに早く居なくなるなんて思っていなかった。あと精々3人くらいは残っていると思った。
多分、残っているあの人がペールさんのお孫さんだと思う。しかし、今声を掛けるべきか、私は迷っていた。

どうしようか、と思っていたら、お孫さんの方が気づいたみたいだ。少し目を開いてコチラを見てきた。私も驚いてしまって、その場に立ち尽くしていた。

「えっと……ラヴェリア様？」

「あっ…はい。そうです、ラヴェリアです。」

「じーさんから聞いてますよ。ナジャのことですよね？結構知ってますよ。」

「え、えっとそれで今はっ……」

彼の前には少しデコレーションされているケーキがあった。

これはペールさんが言っていた集中している時ではないか、と思った。邪魔してしまったようだ。

私は空気を読めるようにならなくてはならない。いくらたくさん人がいたら嫌だからという理由だけで、押しかけたらダメなのだ。私みたいな役に立たない人間よりみんな、何かをして役に立っている。愚かな私と一緒にしてはいけない。

――出直そう。

そう思った私は、足早にこの場を去ろうとした。勢いよく開けた扉を閉めようとすると彼の方が慌ててコチラに近づいてきた。気を使わしてしまったのだろうか、申し訳がない気分になった。

閉めようとした扉を彼は掴んで、私の動きは止められた。彼は、ニ

ニコニコして笑顔を見せていた。その表情に私は、困惑した。

「ラヴェリア様、俺のケーキ食べませんか？」

「……は？」

私は、初めて呆気にした。

そして、冒頭に戻る。

＊

彼の前にあった少しデコレーションされていたケーキを私は、一切れ貰った。
ほっぺたが落ちるくらい美味しかった。

それを言うと、彼――リークは、『そんな大袈裟な』と言って笑った。大袈裟じゃなかった、彼のケーキは美味しかった。
ケーキを食べ終えると、彼はお茶を出してくれた。しかも、ハーブのお茶だった。

私が驚いていると、彼は『フィリアからよく聞いているんで』と言った。どうやら、知り合いのようだ。よくデザートを強請られると言っていたから、フィリアも彼の作るデザートを絶賛しているようだった。

他にもたくさん食べてみたいが、今はナジャのことが先だ。

私は彼に聞いた。

「ナジャは知っていると思いますが、旦那様の前妻、ソフィア様の妹です。」

「ナジャって私と同じくらいじゃないの？」

「女性の年齢は言うのはあまりよくないですが、ナジャは今年で２３になりますよ。ラヴェリア様とは案外離れてますよ。妹って言っても、ナジャはソフィア様とは異母兄弟なんですよ。」

「“異母兄弟”？」

「はい。ソフィア様は男爵―ネフェロイ男爵の前妻の子で、前妻はソフィア様を産んですぐに亡くなったらしいです。それから１５年近く、男爵は妻を娶らなかったんですが……」

「ナジャのお母様と結婚したの？」

まぁそうですね、とリークは言った。

“異母兄弟”――初めて聞く単語だ。
不思議だな、と思った。
母親が違う姉妹というのはどういうものかは分からない。その前にまず私は、兄弟と言うところから分からない。私と血の繋がった後から産まれた子だとは分かる。
でも、何故それが私と同じ血が流れているのかが分からないのに、それを『家族』と呼ぶことが出来るのか。
また、私には分からなかった。

「あぁ、そういえば。」
「そういえば？」
「侍女たちが噂してたんですよ。まぁ、信憑性ないから何とも言え

ないですが。」

「何て言ってたの？」

「ナジャの奴、旦那様に想いを寄せているらしいですよ。かれこれ２０年近くになるそうですよ。」

“想い”を寄せている？

母が父を『愛している』のと、同じ？

『愛愛愛愛愛愛愛愛、愛。』

ナジャを、ナジャを止めないと。

――ナジャが、“魔女”になる。

また、嫌われた（前書き）

短いです。
まだまだナジャ、続きます。

また、嫌われた

私はハーブのお茶をそのままにして、厨房をすぐに出た。

リークは一瞬だけ呆けていたが、すぐに慌てて、私に何かを言ったようだった。しかし今は気にとられている場合ではなかった。申し訳なかったが、仕方がなかった。

私はナジャを止めることしか考えていなかった。

――“愛”はダメだ、呪文なのだ。

私は知っている。

『愛』は、誰かを殺す。

『愛』は、誰かの大切なものを壊す。

『愛』は、相手も壊す。

――『愛』は、人を“魔女”にする。

『愛』は、ダメだ。今ならナジャを止められる。
私はもう見たくない、感じたくない、壊されたくない。
ナジャが誰かを殺す前に、誰かの大切なものを壊す前に、止めなくては。

私は洗濯場へと足早に向かった。

＊

走ってきた私に、洗濯場にいた使用人たちは驚いていた。私はそん

なことを気にせずにナジャを探した。
しかし、ナジャの特有の赤色の髪は、見当たらなかった。すぐ傍にいた人に聞いた。ナジャは、今は洗濯を干しているところだと言った。私はお礼を言って、ナジャのところに行った。

白いシーツがたくさん干されていた。
私の視界は白一杯で、目的の赤色は見つからない。私は、シーツとシーツの間を割って探し始めた。しかし、探しても探してもナジャは見当たらない。

走ってきたせいで、私の呼吸は荒かった。大きく深呼吸をして、息を整えた。
辺りを見渡した、一瞬赤色を見た気がした。私はそこへ走っていった。

たどり着くと、目を見開いて、驚きと困惑が混ざった表情をしたナジャがいた。私はすぐにナジャの手を掴んだ。呆気にとられていた彼女は、反応できずに私に手を掴まれたせいで持っていたシーツを地面に落とした。

白いシーツに土の色が染み込んだ。

「ちょっと、なにするっ…」

「ダメっ！！」

「はぁっ！？何がダメなのよ、私はちゃんと仕事をしてるわっ……」

「“魔女”になっちゃダメだよ！！」

私は精一杯叫んだ。
初めてこんなにも大きな声で話した気がした。それぐらい、私は焦っていた。

ナジャの仕事を邪魔してしまったのは、申し訳なかった。でも、今の私に謝るなんて余裕がなかった。

ナジャが“魔女”になるのは、嫌だった。だから、叫んだ。

ナジャは、私を睨んだ。仕事を邪魔したせいだと思う。

「“魔女”？何で私が魔女になるのよ。」

「っだって、お父様のこと好きなんでしょっ！？だからっ…」

「人を『愛』したら、魔女になっちゃう！私は、ナジャに“魔女”になって欲しくないのっ！！」

――言えた。

今までこんなに一生懸命になったのは、３回目だ。
乳母を笑わそうとしたとき、父と話せるチャンスを与えてくれるはずだった花壇の世話。
そして、このナジャのことで３回目だ。

初めて叫んだせいか、息が苦しかった。息を荒くしながら、私はナジャを見た。
私はそのときのナジャの表情に驚いた。

――人形みたいに無表情だった。
――目がとても曇っていた。

「……ちょっと待って。……知ってんの？」

「えっ……」

「アンタが何でそんなことを知ってんのって聞いてんのよっ！！」

ナジャは、無表情だったものをすぐに怒りに変えた。私は、怯えた。怖かった。
ナジャの気迫にやられた私は、ナジャの手から手を放して、距離をとろうとした。

しかし、それは許されなかった。放した手をナジャによって掴み返された。
私はされるがままになり、ナジャとの距離をつめられた。
ナジャの瞳が怖いっ……！！

「……アンタ、本当にムカつく。テオリア様を独り占めしたいの？」
「ちがっ……わたし…」
「あぁ、それとも何？お前なんかただの“妹”でしかないんだって遠回しに言いたいの？」
「そんなっ……」

「っ…ムカつく。アンタ、私の前から消えてよ。」

ナジャにまた嫌われた。

フィリアの決心（前書き）

誤字脱字報告を宜しくお願いしますm（＿＿）m

フィリアの決心

ナジャは掴んでいた私の手を力一杯握ってきた。私はその力の強さに顔をしかめた。
でも、私なんかよりナジャの方が辛そうに、苦しそうな顔をしていた。
ナジャは、暫く握った後に振り払うかのように手を放した。手はじんじんと痛みがした。私は呆然としながらも、痛む手を反対の手で包み込んだ。でも逆にそうすることで痛みが増してきた気がした。

ナジャの方に視線を向けると、彼女は顔を俯せて、身につけているエプロンをぎゅっと握っていた。エプロンには、皺が広がっていた。私はどうしたらいいか分からず、ただナジャを見つめることしか出来なかった。

どのぐらい経ったかは分からなかった。土の色が染み込んだシーツを手にとって、一度も振り向くことなく私の前から消えた。

そこに残ったのは、青くて高い空と真っ白な雲。それと、同じぐらいの真っ白なシーツと――――

ただ、痛みが引くことがない手を片方の手で握り締めている哀れな私だけだった。

＊

私はナジャに嫌われたということだけを感じとっていた。
ただ私は、ナジャを止めたかっただけだった。
でも、彼女は分かってくれなかった。それよりも私がしたことに腹を立てられてしまった。
私はそれしか知らなかった。だから怒られたときどうしていいか、分からなかった。

やっぱり私は役立たずだった。

あれから私はその近くにあった木の根元で座り込んでいた。
目の前には、シーツが風によって靡いていた。

私はまだ握られた手をまだ擦っていた。

痛みが引かないからだ。私は必死に擦った。

でも痛みは退くことがない、増すばかりだ。

擦っている手に水が落ちてきた。私は空を見た。でも、空は青くて先程まであった雲さえもなくなっていた。とてもいい天気だ、散歩を後でしよう。

可笑しい、視界が歪んできた。歪んで歪んで歪んで、私の頬に何かが流れた。

私は手で頬に触れた。

濡れていた。私は手で水を拭き取った。でも、それでも流れてくる。

私は、水が何なのか分からなかった。

――――水は、涙だ。

そうようやく私が悟ったとき、私の前には突然消えた私を追いかけて来たと思われるリークと彼について来たフィリアが悲しい顔で私を見ていた。

＊

私の前には、ホットミルクが置いてある。フィリアが入れてくれたものだ。

ここは私の部屋だ。二人は涙でボロボロになっていた私を支えなが

ら、部屋へと向かった。暫く二人で私を宥めていたのだが、リークはまだ仕事があるということで厨房へと戻って行った。
彼が戻ると言って出て行った後、このホットミルクは私の目の前に置かれた。しかし、これを飲む気にはなれなかった。大分時間が経っているが、いつかのときのようにまたフィリアは、このホットミルクを片付けようとはしなかった。

私は下げてくれ、と願うようにうつ伏せていた顔を上げて目線をフィリアに合わした。
しかし、それは彼女には逆効果だったようで、彼女は私と目が合った瞬間――――とても輝かしい笑顔を見せくれた。いつもは心が暖かくなる笑顔だが、こうゆうときに見るととても辛かった。

気を使わしている気がして、ナジャのように心を読まれているような気もした。
申し訳なさと苛立ちが混ざった何とも言えない感情が、私がこの笑顔に包まれると襲ってくる。

――――やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて、・・・・

「っ・・・やめて！！フィリア！！」

「っラヴィエラ様！？」

私は笑顔をやめて貰うのに必死だった。フィリアのことなどおかまいなくだ。

私は、近くにあったフィリアが入れてくれたホットミルクを手にとった。

そして、私はフィリアに向かったそれを投げた。私の声と行動に驚いていたらしいフィリアは対処できず、顔にホットミルクがかかった。
勿論ホットミルクが入っていたカップは、床に落ちた。そして、落ちたと同時に鈍い音を立てて、粉々に砕けて、私とフィリアの辺り一面に散っていった。

一瞬、私は何が起きたか分からなかった。私の視界から見えているのは、オレンジ色のスカートの一部についた白いシミ、お気に入りだったコップ。そして、顔を俯かせて表情を見ることが出来ないフィリアだ。

「あっ……フィリア、ごめんなっ」

「申し訳御座いませんでした、ラヴェリア様。すぐに此方を片付けておきますので、散歩の方を先に為さって下さい。」

「まっ」

「失礼致しました。」

フィリアは顔を俯かせたまま、お辞儀をした。私に背中を向けてドアへと向かって行った。多分、掃除道具を取りに行くつもりだろう。私はフィリアを止めようと、彼女の腕をとろうとした。が、それは無理だった。
フィリアが歩くのが早かったからだ。

伸ばした手はフィリアには届かず、宙を浮いたままになってしまった。
そして、パタンという扉の音が虚しく部屋に木霊した。

――私は、馬鹿で無力な愚者だ。
そう思いながら、私は頬に涙を流した。

＊

「はぁ、悪いことをしちゃったかしら。」

私は悩んでいた。
悩み事は、只一つ。傷ついて今にも泣きそうな顔をしたラヴェリア様を部屋に残してしまったことだ。あれは、マズい。
でも、私があの場に残っていてまた、笑顔を見せれば、ラヴェリア様は辛そうな顔をするだろう。
ラヴェリア様は、笑っている私をナジャのことと重ねたのだろう。
今、あの方の中はナジャのことで一杯なのだから。しかし、どうし

たものやらと悩む。

私から言わせて貰えば、あの喧嘩はくだらない。恋心を抱くナジャが、突然現れたラヴェリア様を勝手に目の敵にして、暴言。それを自分のせいだと、思い詰めて悩んでしまったラヴェリア様は、ナジャに謝ろうとする。しかし、何かがあったのだろう。逆にナジャを怒らしてしまって、呆然状態になってしまっている。

この後は、今あった私の事件でラヴェリア様が更に傷ついてしまったという、私の痛恨のミス。やらかしたわ、本当に。
恋は人を変えると言うけど、ナジャの行動は頂けない。

このままだと、ラヴェリア様はまた心を閉ざされてしまう。最初に

あった頃のようになる。

――やりたくなかったけど、仕方がないわ。ムリヤリでもあの2人の仲をよくするしかない。

私は、旦那様の元へ向かった。

あ、部屋の掃除は“彼女”に押し付けよう。

キレイなヒト（前書き）

遅くなりました！
誤字脱字がありましたら、すみません（―・―；）

キレイなヒト

キレイな人だった。
とても綺麗だった。
話していたら、少し不思議な気持ちになった。

＊

「……フィリア、本気かい？」

「ええ、本気です。後は旦那様が快く了承してくださればいい、と私は思っております。」

「最初にこのことを言ってきたのは、君じゃないか。加えて反対もしていた。その君があの時の私に賛同するのかい？」

「はい、それが最善だと思いましたわ。旦那様。」

「……分かった、了承しよう。」

「分かって下さり、ありがとう御座います。」

これは使いたくなかったけど、仕方がない。ラヴェリア様の為に今を何とかしなければならないっ…！！

このフィリア、僭越ながら一肌脱がせていただきますわ！！

＊

フィリアが部屋から出て行った後は、あまり覚えていない。ただ、部屋には居たくなかった。彼女は部屋を片付けに戻ってくるだろう。その時鉢合わせては、どうしようもなかった。私はまた、何も言えないまま、フィリアに気を使わせてしまうだろう。居心地の良くない空気が流れるのは、必須だ。止めておいた方がいい。

私はそう思って、すぐに部屋を出た。日課の散歩も兼ねてだった。
暫く歩くと、庭にたどり着いた。
庭には、とても綺麗な花たちが私を暖かく迎えてくれた。ほんの少しだけ、気持ちが楽になった。
私は今、この庭の一部をペールさんから借りている。城にあった花壇を造らせて貰った。最初は、私のたった一言だったのだが、どの経路を辿って行ったのかは分からないが、お父様がそのことを知りこれを造ったのだ。凄く驚いていたのを覚えている。
断ったのだが、お父様は既にここに種を植えていて、『枯らすなんて可哀相じゃないか』と言われてしまい、私は困った。
暫くして渋々私が諦めて、この花壇を貰った。お父様はなかなか口が立つ方なので、私は一生勝てないと思った。
それからは、元々日課だった散歩の時にここへやって来ては、水やりをしている。

しかし、いつも通り迎えてくれた花たちとは違ったものが一緒にいた。黒い影が一緒にいる。黒い影は、花たちを見つめている様子で私は近づくことが出来なかった。

後ろ姿は華奢に見えたが、体格は女の私よりはしっかりしていた。背丈は私より断然大きく、ここで男性だと分かった。ただ黒い影に見えていたが、それは着ていた衣服のせいだったようだ。衣服事態が、黒を基調とするものばかりだった。それに加えて、彼自身の髪は黒色だった。黒といっても、紺色も混ざっていて、不思議な色合いを見せていた。

――キレイな人。

私は心からそう思った。

「――っ誰だっ！！」

「きゃ！？ごめんなさいっ！！」

私がそう思っていると、彼は気配に気付いたのだろう。後ろを振り返った。

私は慌ててしまい、声を上げてしまった。逆効果になってしまうことなのに。そのため、彼の視線は鋭くなり、私を睨みつけていた。

しかし、私は呑気なことにその瞳を見つめてしまった。

彼は綺麗な翡翠のような緑色の瞳を持っていたから。

私の様子が可笑しかったのだろう。彼は眉を潜めていた。どうしよ

う、と考えていると、彼は此方へ向かって歩いてきた。私は益々混乱してしまった。しかし、ここで逃げてしまえば、彼は不振に思うだろう。

――大人しくしておこう。

私はそう決めた。

だが、それはものの数分で打ち砕かれた。私との距離を縮めた彼は、まず収めていた剣を抜き取り、私の首元に当てた。私は驚き、また恐怖を覚えた。こんなことをされるのは初めてだ。当てられた首から剣の冷たさが伝わり、広がるように体が震え始めた。っ……彼は、怖い。怖い怖い怖い怖い、瞳をしていた。

「……シクザール侯爵には、“娘”はいないと聞いているが、貴様は何者だ。」

「っ……わ、わたしはっ…」

「侍女か？それにしては、身なりが整っているな。」

「ちがっ…」

「お止め下さい、デュラン様。」

恐怖で体が震え、言動がままならない私と目の前の彼との間に声が入った。彼は私に向けていた視線を後ろの声の主へと移していた。私も誘われるように後ろを振り向くと、そこにはナジャがいた。

――何故。

私が思った。それと同時に思考が固まってしまった。こんな時にナジャも来たのだ。どうしていいか私には分からない。しかし、そんな私をほっといているのか、会話は続いた。

「貴様は、侍女か？」

「はい、ナジャと申します。そちらにいらっしゃるラヴェリア様に仕えております。」

“ラヴェリア”？聞いたことがないな。」

「お耳に入っていらっしゃらないかもしれませんが、旦那様が養女として迎えられ、この度シクザール家の御息女となった方です。」

「……ふむ。」

ナジャの紹介で彼は納得したようだった。彼女の話し方からこの人は高い身分だろうということと名前が“デュラン”ということだけしか私には分からなかった。今の私にはそれだけしか考えられなかった。かつてないほどの恐怖に足が竦みそうなのだ。こうして２人が話している間も首元に剣が当たっているのだ。怖くて仕方がないと思う。しかし、２人は気にしている様子もない。というよりも気づいていないのだろう。……非常に不味い。

「――ということです。御理解頂けましたか？」

「成る程、シクザール侯爵の悪い癖だな。あの方は相変わらずみたいで良かったよ。」

「はい。……ラヴェリア様？」

「っ……い」

「？あぁ、すまない。剣を収めていなかったな。申し訳ない、ラヴェリア嬢。」

漸く気付いて貰えたようだった。怖かった。
しかし、今の私には恐怖よりも怒りが勝っていた。久しぶりに怒っている。原因は、今の今まで忘れていたことだ。幾ら怪しいとはいえ、最初にナジャが言ったではないかと思った。私は先程恐怖で震えていた体を今度は怒りで震えさせた。ナジャと目の前の彼は、勘違いしているようで『恐怖』によって震えているように思っているようだ。その証拠に彼は、少し困った表情を見せている。
それも今の私には、腹立たしいと思った。気がついたら、手が出てしまっていた。

「っ…最低！！」

「っ！？」

「えっ……ラヴェリア様！？」

バチン。

昼下がりのシクザール家に大きなビンタの音が鳴り響いた。

＊

「本当にアンタって正真正銘の馬鹿でしょ！？」

「っ！！」

部屋に戻った瞬間――――ナジャに怒られた。

あの後、ナジャはその人に頭を下げていた。

――申し訳御座いません、と。

彼はビンタは予想外だったようで少し呆然としていたが、別にいい

と言って許したようだった。ナジャはほっとして、直ぐに私を睨んだ。私は怯えた。またやってしまった、ナジャに嫌われたと思った。つくづく私は何かをやってしまう質のようだった
。

それから彼は私に視線を向けた。申し訳がなかったので、私は視線を地面に向けた。今回は、私が悪いだろう。怒りに身を任せて、叩いてしまった。加えて幼稚な理由だ。これは、大人としてどうなのかと疑われる行動だ。お父様の、シクザール家に名を汚す行動だ。冷静にならないといけないと思った。

「……すまなかった。あなたは剣を向けられたことがなかったのだろう。」

「っ……いえ、私も悪いことをしました。叩くなんてっ……」

「いや、私は嫌いじゃないよ。君のような女性は。」

「えっ……？」

彼は優しい口調で話してくれた。先程の恐怖はどこに行ったのだろう、と問いかけたくなるほど私は落ち着いて話していた。彼は私の行動に特に咎める様子もなく、寧ろしどろもどろになりながら話している私の様子に笑っているようだ。
……お父様に少し似ている気がする。
そのためか、私は振り回されているように思えた。彼の話に私は益々しどろもどろになっていた。
何だか歯がゆいのを感じた。慣れていないため私は照れくさくなってきたのだ、止めて欲しい。

――助けて欲しい。

心から思った。

「君はキレイな瞳をしている。触りたくなるな。」

「えっと……ありがとう、御座います。」

「あ、あのデュラン様。付き人の方がっ……」

「あぁ、時間のようだな。ラヴェリア嬢、またお会いしましょう。」

「は、はい。」

ナジャがどうやら入り口で来ていた彼の付き人に気付いたようで、私は彼から漸く解放された。……苦しかった。

彼は私に名残惜しいような視線を向けながら去って行った。どのような反応をしていいか分からない私は、とりあえず手を振った。その様子に彼も笑顔を見せてくれた。

彼は少し手を振り、私たちに背を向けて歩いて行った。暫くの間、私は手を振った。彼の笑顔は、キレイだった。私の瞳を彼はキレイだと言ってくれたが、彼の方が私はキレイだと思った。

考えていると、変な気持ちになった。

そんなことを考えていた私にいきなりナジャは、私の肩を掴んだ。
私は驚いていたが、彼女が気にすることはなく、そのまま私の部屋に連れて行かれた。

そして、冒頭に戻る。

「世間知らずにも程があるわ。国民ならみんな知っている筈なのにアンタ知らないって。どこから来たのよ、アンタ。」

「……。」

「はぁ、いきなり持ち場に戻れって言われて最悪よ。顔も見たくないのに。」

悪態をつかれていた。ナジャを何度も怒らせてしまって、私はどうしていいか分からなかった。でも、あの時とは違って鋭いトゲがない。まだ柔らかい感じがした。

……それでも、溝が深い気がする。

彼のことがあったせいで忘れていたが、何故ナジャは部屋付きに帰って来ているのだろうか。フィリアはどこに行っただろうか。私の頭の中はぐちゃぐちゃに絡み合ってしまった。

「――――…ってアンタ聞いてるのっ！？」

「えっ……ごめんなさいっ…きいてなっ」

「っ……もう一度言うわよ？」

「あのお方は、デュラン。――デュラン・トゥム・レーギス・アメタトス。この国の王子、つまり王太子殿下。」

……予想以上に彼は偉い人のようだった。

『約束』（前書き）

遅くなりました。すみません。
読んでいただけたら幸いです。

『約束』

あの事件の後、私はナジャによってこの国についてこってりと教え込まれた。知らなすぎる、世間知らずすぎるという理由だ。
私がこの国について知らないのは、当たり前だ。私が生まれ、育ったのはエウィルネダス、父が淡々と政治を治め、母によって生み出された恐怖により押さえ込まれた国だ。ここ――アメタトスとは、異なる国なのだ。知らなくて当然だ。

国の習慣は、エウィルネダスとは大きく異なっていた。その違いに私は戸惑いを受けた。
一般庶民でも知っていることを私が知らないということを理解したナジャは、大きなため息をついた。
今思い出したが、ナジャが何故私の部屋付きに戻っているのだろうか。フィリアは一体どうしたのだろうか。色々と聞きたいと思ったが、口を開けば、すぐに余計なことを言ってしまう私にはなかなか切り出すことが出来なかった。
でも、これでナジャが戻ってきてくれたことが嬉しいと思っている自分がいた。おこがましい自分がいた。しかし、代わりにフィリアがいなくなった。私はあの時のせいだと思った。やっぱり私は余計なことばかりしてしまう。

――厭らしく、醜く、愚かなんだと思った。

やはり私は『魔女』である母の子なのだと感じた。

＊

あれからため息をついたナジャは、私に作法を沢山教えてくれた。
でも、ダンスなどのものはいらないと私は思った。舞踏会に憧れないのかと言われれば、ノーなのだが、私には場違いすぎると思った。確かに私は今、仮にもシクザール家の娘だ。一族を安泰させるにはやはり舞踏会に出て、いい相手を見つけるべきなのだろう。
でも、お父様は行きたくなければいかなくてもいいと言った。昔に奥様を亡くなった時に再婚はしないと決めていたらしく、子を残すつもりはなかったらしい。しかし、シクザール家を存続はさせなくてはならないといけない。そのため、他の家の子息を養子に貰うということをしたらしく、跡取りには困っていないようだった。

・・・ちょっと悲しかった。
跡取りに困っていないのは安心したが、自分はここでも『認識』されていないのか。
少し、まだ自分が『あなた様』と呼ばれていた時を思い出した。父や母は一度も来なかった。名づけにさえもだ。私は本当は『何者』なのだとろうか、本当に母の娘だったのか。
私はただ『魔女』が幸せを手に入れるためだけの道具に過ぎなかっ

たのか。
沢山思った。でも、答えなど既に分かっていた。
私は母が出産した父が分からない1人娘で、幸せを奪い、『あのお方』を殺して、父を手に入れるための道具。
そこまで考えていると、私が話を聞いていないと気が付いたナジャが凄い目つきで睨んできた。私はそれが怖かったので、背筋を伸ばした。それがいけなかった。
その行動で聞いていないということを明確にしてしまい、ナジャを余計に腹立たせてしまった。眉間に皺を寄せている。怖い。

「ちょっと、はぁ・・・」
「ご、ごめんなさい・・・。」
「もういいわ、それよりあんたはその弱気な言動をやめなさい。」

「え・・・？」

「そこまで聞いてなかったの？あのね、デュラン様があんたを気にいったらくして、是非一ヵ月後にあるパーティに参加して欲しいそうよ。だから、これからダンスと礼儀作法の特訓よ。」

「・・・・・・・」

開いた口が塞がらないとはこういうことだと思った。ナジャは何といっただろうか。

パーティー？・・・嘘だ。私が参加しても無意味なものだ。跡取りもいるし、私なんかが出席したらお父様の顔にまた泥を塗ってしまう。デュラン・・・王太子様もだ。私の何を気に入って、出席して欲しいと言うのだ。いきなりビンタをした常識知らずの女なのに。

・・・まったく分からない人、だ。初めてあう人柄だ。しかし、私は言うほど今まで異性と触れ合うことをしていないので、何の根拠もないのだが。

そんなことを考えていると、ナジャはいきなり分厚い本を出してい

た。驚くほど厚いその本には、表紙に『礼儀・作法の理念』という難しいタイトルがつけられていた。彼女は、その本を開いてこちらを見てきた。輝かしい笑顔だ。私はそんなナジャの笑顔を見たことがなかったから、少し目を開いて驚いた。
これまでの会話でナジャが喜ぶようなことはあっただろうか、私には理解ができなかった。

「ということで後1ヶ月で、あんたを素敵な『レディ』にしてあげるわ。」

「え・・・・・？」

「デュラン様、直々に招待をしてもらうのよ？あんたに気があることは間違いなしじゃない。これを狙って玉の輿よ。あんたも王妃になって幸せ、旦那様の名声も上がって万事解決よ。」

「・・・『玉の輿』？それをすれば、お父様は喜ぶの？」

「・・・？当たり前じゃない。シクザール家は今まで王妃を出して

ないのよ。だから貴族の間では、少し馬鹿にされてるのよ。『王妃たる器を持った娘も育てられないのか。』とか、言われているわ。いくら伯爵でも子爵とかか馬鹿にされてるのよ。あんたが、王妃になればそんなこともなくなるわよ。」

「・・・・・・王妃になれば、ナジャも喜ぶの？」

「え・・・」

私の質問にナジャは答えてくれなかった。喜んで言ってくれると思ったのに、予想とは反対にナジャは険しい顔をしていた。私には分からなかった。

『王妃になればみんな喜ぶ』――――そう言ったのはナジャなのに、ナジャは喜ばないのだろうか？

お父様は名が上がって喜ぶ、みんなも鼻が高くなるだろう。でも、ナジャは喜ばないのか。

何故なのかは分からない。それでもナジャは私が王妃になっても嬉

しくないのだろうか。

「・・・・・当たり前よっ！！嬉しいわよ。あんたが王妃になれたらの話よ。他の貴族だって、自分の娘を売り込もうと必死なんだからね。きっと秀才で美しい人が選ばれるに決まってるのよ。・・・あんたなんか、勝てっこないわ。」

「・・・でも、王妃になったら嬉しいんでしょ？だったら、私、『王妃』になる。」

「え・・・」

「ナジャ、もしも私が王妃になれたらお願いがあるの。」

「・・・何よ？」

「私と、『友達』になって。」

私は、そう言ってナジャに手を差し出した。フィリアに教えて貰った。この行為は、このアタラトスでの約束をするときの行為だ。相手に手を差し出して、相手がそれを了承したら『約束』をしたということになる。しかし、相手がその手を払ってしまったら『約束』は成立しない。

ナジャは、暫く何も答えてくれなかった。私が彼女の手に視線を巡らせると、その手は堅く握り締められていた。

———やっぱりナジャは、私なんかとは『約束』などしてくれないのだろうか。

そう思うと、堅く握り締められていた手を私は見ることができなくなった。そして、目線を自分の膝へと移してしまった。理由は、自分が酷く惨めに見えてきたからだ。今までのことを考えると一目瞭然だった。みな、嫌いな奴とわざわざ『約束』なんてしない筈だ。ナジャは私のことが嫌い、それだけだ。
私はそんなことを考えていて、手を下ろそうとした。『約束』なんてしてくれないからだ。

ゆっくりと手を下ろしていき、臥せた目線まで手が見えた瞬間――
―私の手は酷く強い力で引っ張られた。
私は一瞬何か分からなかった。ナジャの他に誰かいただろうか。否、目の前には彼女しかいない。見なくても考えなくても分かる。ナジャの手の力だ。私は彼女に手を引かれて、自然と目線が上がり、見えた先は彼女の紅い髪と、薄い優しい色をしたこげ茶の瞳だった。
しかし、その瞳はとても揺れていた。

「するわ、その『約束』。」

「・・・ほんとう？」

「するっていってるでしょ！！早くしなさいよ！！」

「う、うんっ・・・！」

嬉しかった。私は心が踊りだしそうだった。こんなこと『約束』なんてしてくれないと思っていたからだ。
私は、力強く握り返した。ナジャもこちらを見て、しっかりと握った。互いに額を合わせ、手を握りしめる。これはアメタトスでの『約束』の仕方だ。
エウィルネダスには『神』は、いなかった。宗教は多種多様あり、人がそれぞれの神を信仰していた。だが、ここアメタトスでは違った。ここではただ1人の神『ティフェウロラ』に対して証を立てる。

「・・・ほら、約束したでしょ。」

「うん、ありがとう。ナジャ。」

私はただ、嬉しかった。

「とても筋がよろしいですわ、ラヴェリア様。とても良いターンでしたわ。」

「ありがとうございます、ネピィオ先生。これも先生のおかげです。」

「あらまぁ、そんなことはありませんわよ。ラヴェリア様の努力の結晶ですわよ。」

ナジャとの約束から早、二週間が過ぎようとしていた。
あれから私は、ただ礼儀・作法、舞踏会でのダンス、国の歴史などともかく沢山の知識を頭に入れていった。とは言っても、これだけのことを教えてくれたのは、ナジャだけではない。私のために教師としてきてくださった。ネピィオ先生のおかげでもある。

『勉強がしたい』――――そう言った私にお父様は驚いていたが、快く承諾してくださった。そして、家庭教師として呼んできたのが、ネピィオ先生だった。彼女は昔、現王妃に対して教育を行った人であり、数多くの貴族令嬢の教育を受け持っていたらしく、貴族間では彼女に任せば必ず立派なレディにできるというジングスもあるぐらい信頼を得ている人だ。そのジングス通り、彼女の教え方はとても上手でどんどん私は色々なことを覚えていった。そして、それに比例するように近づいていくパーティーまでの日数が迫っていた。
私は、『王妃』にならなくてはならない。ナジャと約束したのだから。お父様もフィリアもこの屋敷の人たちみんなが喜んでくれることだ。なれないなんて許されない。

私は、その思いを込めながら今日も先生の授業を受けていた。

「ラヴェリア様、お茶の時間で御座います。」

「あ、ありがとう。」

あれからナジャとは、距離ができた。しかし、これは彼女が意図的に生み出した距離だ。
私に対してタメ口を言わなくなったし、『あんた』、『馬鹿じゃないの』とかも言わなくなった。嫌い、と言われなくなったのは嬉しいが、何だか寂しい気がしてきた。
今目の前にいる彼女は、あまりにも『作られている』ように見えてしまうからだ。あの頃の方が彼女らしい。でも、これが普通の彼女の姿なのだろう。早く慣れなくては。

「本日はパティシエ・リークにより、自信作をご用意いたしました。次のパーティでも、デザートとして並べることだそうです。今回は、是非ラヴェリア様のご感想がお聞きしたいとのことです。」

「リークさん、やっと自信作ができたんだ。・・・よかった。」

「・・・・・・ラヴェリア様、使用人風情に『さん』など不要です。おやめください。」

「え、・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・分かりました。気をつけます。」

こんな風に注意されることはよくあることだ。彼女は段々と、『侍女』として私に接して来ている。

私との『約束』は、する気はなかったのだろう。これが、答えだ。

私の目の前に、ケーキが出された。リークさんは今回、シンプルに決めると言っていたから、無難にシフォンケーキにしたのだろう。白く輝く生クリームがとても美味しそうだ。しかし、私はフォークを持たず、そのままでいた。そんな私の様子を不振に思ったのだろう。彼女からは視線を痛く感じていたが、それを無視した。彼には申し訳ないと胸が痛んだが、食べる気が起きなかった。

彼女はただ視線を向けてくるだけだった。これが以前の彼女なら「早く食べなさいよ。」と呆れたように言ってきたはずだ。そんなことがない、今の状態が私には寂しくなった。

今の彼女は、まるで人形のように思えた。

「・・・・・ラヴェリア様。次の授業の時間です。デザートは後でお食べになられますか？」

「いえ、いらないわ。リークにごめんなさいとお伝えして。」

「かしこまりました。では、授業の準備をして参ります。」

彼女はディーセットを持ち上げ、私に一令し、扉を開けて出て行った。

パタン、という音が私の心の中に空しく響いた。

また、嫌われた。

＊

「何をお考えなのだ！殿下は！」

「落ち着いてください、アスフォード殿。」

「黙れ、ルクス。殿下はシクザール家の養女を招待したいと言っているではないか！血の繋がりのないただの平民をだぞ！これが黙っておれるか！！」

「しかし、これは殿下からの命令ですからね。どうすることも出来ません。」

ふん、気にくわん！とラスフォードと呼ばれた男は、優美で美しい彫刻を成された扉を乱暴に開け、部屋から出て行った。バタンという何時もより大きな音と共に部屋は静けさが広がった。静まり返った部屋に「はあ。」という大きなため息が響いた。部屋の主である彼は、机の上で手を置き考えていた。この話し合いの問題となっている自分の従兄弟である王太子のことだった。厄介なことをしてくれたと、心の奥底から思った。

事の発端は、彼がシクザール侯爵の屋敷から帰ってきた時だった。今回シクザール侯爵の元に行くことになったのは、王妃選抜という名の舞踏会の招待状を届けに行くことだった。普通なら従者がする仕事なのだが、シクザール侯爵は現国王の右腕とも言える存在で、彼は幼い頃からお世話なった侯爵には自ら渡したいと彼が言ったのだ。正直、国王陛下がご病気になっているこの忙しい時にやめて欲しいと思った。しかし、侯爵にお世話になっているのは事実だ。渋々行くことを許可したしたのが、全ての始まりだった。

侯爵家から帰ってきた彼は、いつになくとても穏やかな雰囲気をしていた。そんな彼の様子を見るのは久しぶりだった。私は目開いて驚いていたはずだ。そして思わず、頭を打ったのかと聞いた。彼は「お前は、俺に対して失礼な奴だな。」と少し顔を顰めながら咎めてきたが、その言動は優しいものだった。益々、何か変なものを食べたのではないか、本当に頭を打ったのではないかと思った。そんな私の様子に彼は笑っていた。大方、私がまだ怪しんでいることに気がついたのだろう。呆れたような笑みを浮かべていた。

「どうしたんだ、デュラン。侯爵に何か言われたのか？」

「いや、『面白いもの』を見つけたんだ。」

「『面白いもの』？」

彼は「ああ。」と相槌を打つと、『面白いもの』を思い出したのだろう。片手で口元を抑えながら、笑うのを堪えていた。もう、いっそのこと笑ってしまえ。と私は思った。

しかし彼が関心を持つものなんて、この世には存在しないと思っていたが、世の中捨てたものではなかったなと思った。それほど今回のことは珍しかった。

容姿端麗、文武両道。そんな言葉が珍しくない私の従兄弟は、全くもって女とは無縁な男だった。
幼い頃から彼は、剣術と政治ばかりを勉強してきた。加えて一度決めたことは変えず、国王陛下の反対を押し切って騎士団に入団した奴だ。・・・あの時は大変だった。この王妃を決めるときも大変だった。取り合えず、家名も気品も容姿も申し分がない貴族の令嬢と合わせてみようとした時だった。彼は、「何故、俺が知らない女と会わなくてはならんのだ。」「しかし、殿下。」「知らん。」「これは、陛下の命令ですよ。」と何とか彼を説き伏せたのだ。よし、と思い、令嬢と合わせた。が、それは間違いだった。女と無縁だった奴が、気のきいたことなんて言えるはずがない。令嬢とあった時に言った一言がこれなのだから。

「何をそんなに目元に塗っているのだ？獣にしか見えんぞ。」

あの時は顔を引きつったのを覚えている。あれから令嬢は殿下を咎めることはなかったが、笑顔は怖かった。二度と見たくないものだ。

こんなことがあり、殿下と女性を二人きりにするのは難しいと考えた。我々は、もう殿下に決めてもらうことにした。そこで提案されたのが、舞踏会という名の王妃選抜だ。このことは貴族たちに知らせている。せいぜい、殿下が気に入るような女に仕立ててくれと意味を込めてだ。まぁ、今度招待する貴族の令嬢に彼が気にいるような女性はいる気がしないが。

「おい、ルクス。俺の話を聞いているか？」

「・・・っ。すまない、考え事をしてました。」

「全く、一度考え込むと周りの話を聞かないのはお前の悪い癖だ。」

どうやら、考え事をしている間に彼が何かを言ったようだった。悪い癖だな、本当に。

気を取り直して、「何だ？」と聞いた。彼の口元が少しあがったのが、分かった。

何だ、何なんだ。大抵こんな笑みを浮かべるなんてそうそうないことだ。彼にとっていいことは、私にとって悪いことになることが多い。まさか、何か企んでいるのではないかと思った。絶対そうだ。面倒なことが起こる。

そんなことを考えていると、さっきより周りが騒がしかった。周りを見ると、小太りな男たちが「殿下、殿下。」と言っているのが、聞こえた。どうやら殿下が帰ったことに私以外にも気がついた者たちが近寄ってきたようだ。とは言っても、この者たちは今度招待す

る貴族たちだ。自分の娘を売り込みにきたのだろう。うるさい奴らだと思った。

そんなことを考えているのは目の前にいる彼も同じようで、顔が顰めているのが分かった。気持ちは分かるが、表情を見せるな。後から面倒だろう。

「ルクス、お願いがあるんだ。」

「・・・・何だ、面倒事は止めてくれよ。」

「俺はシクザール家の養女、ラヴェリア嬢が気に入った。彼女を招待したい。いいか？」

「・・・はぁ？」

そしてこれは城中に広まり、冒頭に戻る。

＊

「シクザール侯爵の1人娘か、とは言っても『養女』。色々と問題があるというのに、アイツは厄介なことを。」

私は机の上にある報告書を見ていた。3ヶ月前に登録された記録だ。最初は驚いたが、侯爵のことだ。何かあったのだろうと思った。また同時に家名に泥を塗るようなことをしたなと思った。
容姿は綺麗というより、可愛らしいといったところか。『養女』という以外が申し分はないと思うが、ちゃんと礼儀・作法はできるのかと疑っている。

まぁ、しかし・・・・・・

「あいつが王になってしまえば、こんな我が侭をいうことがないだろうな・・・」

最後の我が侭だろう。私はそう思って、ラヴェリア嬢へと招待状を送った。

笑う（前書き）

更新が遅くて、ぐだぐだ長いなと思ってしまう、今日この頃。

笑う

――ガラガラ・・・

馬車の外から見える光景は初めて見るものばかりだ。活気のある商人の声、わいわいと歩く主婦たち、走り回る子供たち、そして仲慎ましい恋人たち――――きっと城にいた時には想像もしなかった世界が、私の目の前に広がっていた。

今日は舞踏会で着るドレスを仕立てに貰いに来た。あれからもナジャとの間にはギクシャクした菅敬雅続いていた。しかし、時はそんなに待っていてくれることがなく、もう残すところ5日間となった。たった1ヶ月しか習っていないダンスなどを披露出来るかは、はっきり言って難かしい。それに王妃を決めるものなのだ。気品のある美しい人が選ばれる。そんなことを私は考えるようになり、すっかり負け腰の状態だった。馬鹿で無茶な事をするといったものだと思った。もう負けてしまうと考えている私がいた。でも、負けるわけにはいかなかった。私は約束したのだから。

そして、これに加えて今私の目の前には、悩み事の1つである人物がいた。

「いかがなされましたか、ラヴェリア様？」

「・・・いえ、何でもないわ。フィリア。」

３週間ぶりにフィリアにあったことだ。しかも、今回の付き人でもある。

あれから顔も合わす事はおろか、姿も見ることもしていなかったフィリアが今朝になって、顔を見せてきたのだ。そして、唐突に「お久しぶりでございます、ラヴェリア様。」と挨拶をされ、私は頭がおかしくなってしまったのかとも思った。フィリアは、目を開いて驚いている私を尻目に着々と出かける準備をし始めていた。我に返った頃には、「さぁ、出発ですわ。ラヴェリア様、この帽子をかぶりください。外は陽射しが強いですから。」と帽子を被せられていた。・・・驚いていて、何も言えなかった。

そして、この馬車の中でも彼女は暖かい笑みを浮かべて、私を見つめていた。この気まずい雰囲気に陥っているのは、どうやら私だけのようだった。何だか、頭が痛くなってきた。

思えば彼女は、私が拒絶したことを気にしてはいないのだろうか。私は、あの時フィリアを大分傷つけてしまったと少なくとも思っている。何故、ナジャのように彼女は怒ったりしないのだろうか。ど

うして、そんなに笑っているのだろうか。私の中で疑問は次々と思い浮かんではくるが、何一つ解決はしなかった。そうこうしている間に、馬車は目的地に着いたようだった。
馬車は止まり、先にフィリアが扉を開け、従者が近寄ってきて、私は手をとられながら地面へと降り立った。

―――『マルキーズ』と大きく描かれた看板が目の前に広がっていた。王都一のドレス職人がいる仕立て屋だ。

＊

マルキーズの店内はドレスに覆われていた。と、表現するぐらいドレスに溢れていた。私は初めて見る光景に圧倒されてしまった。確かに屋敷にも沢山のドレスは置いてあったが、舞踏会に着て行くよ

うな煌びやかなドレスは私は似合わないといい、全くなかった。逆に動き易く、シンプルなドレスが多かった。そのため、様々なドレスを目の当たりにするのは初めてのため、少し緊張してしまった。こんなに美しいドレスを私は、着こなすことができるだろうか。また、不安が増えてしまった。

そんな私の様子にフィリアは気がついたのだろうか、微笑みながら私の背中を擦ってくれた。とても優しい手つきだったので、私は思わず身震いをしてしまった。それに気が着いたのだろう、彼女は直ぐに手を離し、何もなかったかのように振舞った。・・・また、悪い事をしてしまったと思った。しかし、私はフィリアと顔を会わせることはできず、視線を前へと向けた。向けた先には、髭を蓄えた男性と私よりも少し幼い少年がいた。どうやら、本人が来たようだ。彼らに気がついたフィリアは、私の前に出て、お辞儀をした。

「お待ちしておりました。私がこの店の主人であるテイラー・フィーリスと申します。で、こちらが弟子のボビンです。」

「は、はじめまして！」

「はじめまして、ラヴェリアです。」

私が一礼をし、挨拶を終えると、彼等は少し目開き、こちらを見つめていた。その瞳の奥には、戸惑いが見え隠れしていた。何か不味いことでもしてしまっただろうか、と考えていると、はっとして私は思い出した。
ネピィオ先生が言っていた。

「ラヴェリア様、その態度は少し控えた方が宜しいと思いますわ。」

「態度、ですか？」

「はい。腰が低い態度は平民、つまり使用人に為されてはなりません。あなた様は、養女とは言えど貴族なのです。もう少し威厳をお見せ下さい。」

そう、言われていた。加えてナジャにも先日、怒られた内容だった。彼等が驚くのも無理がないことだった。これだと、きっとフィリアにも怒られるだろう。そう思って、視線をずらしてフィリアの方を私は見た。彼女は特に何か気に障った様子もなく、にこにことしていた。……どうやら、何も言うつもりはないらしい。

「……ドレスをお願いしますわ。」

「……はい。では、こちらへ。ボビン、品物を。」

「あ、はい！分かりました！」

私は気まずい空気を取り戻そうとしたが、どうやら上手くいかなかったようだった。テイラーさんもボビンという子も、何だか気まずいようだった。一礼をして挨拶をする貴族など居なかっただろう。しかも、大貴族相手から。彼等には、申し訳ないことをしてしまった。仕事に支障が出ないことを祈ったが、この程度で支障が出しまうと思ってしまえば、職人に失礼だろうと自問自答のことをしてしまった。

テイラーさんに案内されたのは、店の奥に入り組んだ場所にある広い居間だった。ここは、大切なお客様だけをお通しするらしく、店の他の場所よりも豪華な内装になっていた。豪華と言っても、そんなにも装飾は為されてはいなかった。しかし、品のない部屋だと、普通の貴族ならば文句を言ってしまうのだろうか。それを私は見習わなくてはならないのか、と考えていた。そんなことを考えている間にテイラーさんの傍にはボビンがいた。その手にはいくつかのドレスを持っていた。こんなにもお願いしていたのだろうか、そう考えているとテイラーさんは、私の目の前にドレスを広げた。とても綺麗な装飾がされていて、流石王都一の仕立て屋だと思った。

「ラヴェリア様は、ドレスを注文するのは初めてだと旦那様から伺っております。そのため今回は、いくつかのドレスを見てもらい、希望の品の構想を練っていただこうと思い、こちらで何点か選びました。」

「そうして戴くとありがたいですわ。ではもう、選んでも・・・？」

「はい。ではさっそくこちらの品々を・・・」

私は、それからドレス選びに熱中した。煌びやかなものや装飾が派手なものは私には似合わない。だからと言って、舞踏会にいつものような質素なドレスを選ぶわけにはいかない。加えて、私の髪色は栗色をしている。とは言っても、一目見て誰もが気に入るものではなく、少し霞んだ黒色が混じったような色をしている。こんな髪に似合うドレスなどあるのだろうか。そんなことを考えながら、私は一つ一つのドレスの品定めをした。しかし、こういった経験がない私がそうも簡単に決める事は出来なかった。途中からは、フィリア

やテイラーさんの意見を聞きながらドレスを選んだ。そして、ドレス選びを初めてから3時間、ようやく私が気に入ったドレスが完成した。今思ったが、私フィリアと普通に話している。

完成した事で少し落ち着いた。テイラーさんは「では、こちらを仕立てさせていただきます。」と言って、デザイン画を持って店の奥へと入っていった。入れ替わるようにボビンが現れ、「こ、こちらは、紅茶ですっ・・・！」と紅茶が入ったカップを置いた。私は少し可愛いと思った。兄弟がいたらこんな子がいいな、と考えてしまった。じーっと見てしまっていたのだろう、ボビンが不安そうな顔でこちらを見つめていた。どうやら、機嫌を損ねたと思っているらしい。私は慌てて、「あ、ありがとう。頂くわ。」とカップを持った。その様子に安心したらく、彼は頭を下げて部屋を出て行った。彼が出て行ったことで部屋には、私とフィリアだけとなった。

———何だか、違和感を感じる。そう思いながら、違和感を感じる方へと私は視線を向けた。もちろん、先にはフィリアがいる。

「うぅ・・・ら、ラヴェリアさ、まッ！！」

「ふ、フィリアっ！！？」

彼女は泣いていた。私は驚くばかりだった。
彼女が何が悲しいのだろうか、それとも私の態度がだめだったのだろうか。思いつく限り考えるが、すべての答えに該当することが多く、私の中では答えは出せなった。その間にもフィリアは泣く。

「うぅぅぅっ・・・・・・・・！！」

「フィリア！何か痛いのっ！・・・・もしかして私の態度がだめだったっ！！」

「うううぅ・・・・！！」

「それならごめんなさい！！私が悪いから！！お願いだから、泣き止んで！！嫌わないで！！」

私は思いの限り、叫んだ。
叫んだことによって、テイラーさんたちが異変を感じたらしく、部屋の入り口まで姿を見せていた。それと同時にフィリアは、ぱたと泣き止んだ。そんな彼女の様子に私はまた驚いた。あっさりと泣き止むものだから、何か演技をしていたのだろうかと思ってしまうほどだ。しかし、フィリアの頬には確かに涙の後があり、とても演技とは言いづらかった。加えてテイラーさんたちの視線も痛い。

「ラヴェリア様、私はそんなことは思っておりません。」

「え・・じゃあ、何で・・・？」

「ラヴェリア様と久しぶりに話せて、嬉しいからですわ！！！」

「え・・・」

バーンと効果音がつきそうなくらい彼女は、清清しく言ってのけた。私はどのような反応すればよいのかが分からず、呆然と彼女を見ていた。彼女の周りには、何だかキラキラしたものが漂っているような気がする。そんな様子に、現れたテイラーさんたちもびっくりしている。・・・ごめんなさい。

「さぁ、ラヴェリア様！！さっそくドレスに着替えましょう！！」

「まだ出来ていないよ、フィリア。」

「あ、そうでしたわ。」

そんな笑うフィリアの姿に、笑みがこぼれるのが分かった気がした。

触れた心（前書き）

お待たせいたしました。漸く彼女と向き合えた主人公です。

触れた心

あのドレスでの一件からフィリアは、私の侍女としてまた働き出した。フィリアと話しようになり、私は心に余裕を持てるようになった。しかし、それに比例するかのように私とナジャの間には、底知れぬ溝が目に見えるかのように入っていった。彼女と言葉を交える回数は、一つまた一つと減っていき、今ではまともに話すのは朝の挨拶ぐらいになっていた。しかし、そんなことを気にしている場合ではなかった。

———ついにやってきたのだ。

王太子主催の舞踏会、またの名を『王妃選抜』の舞台の日が。

＊

「ラヴェリア様、如何でしょうか。」

「ありがとう、素晴らしい出来です。テイラー。」

「喜んでいただけて、幸いです。」

ドレスは、注文するのが遅くなりまさかの5日前となってしまっていた。これに対して、テイラーさんには申し訳ない気持ちで一杯だった。何しろ王都一の仕立て屋。お父様にお願いしていたのだが、予約を取ることが出来ない状態が続いていた。そして、連絡がついたのがちょうど5日前だったのだ。

5日間という短い間に彼は、素晴らしいドレスを仕上げてくれた。まず一番目を引かれるのが、濃い紺色だった。そう、ドレスの色は私が今まで着たことがない原色だったのだ。これには、目に入れた瞬間――――思わず驚きの声を上げてしまった。それによりテイラーさんが、少し不安そうにしていたのが視界の片隅に見えた。ごめんなさい。

そして、次に目に見えたのは、自己主張しすぎない装飾だった。少し胸元が開けていて気が引けてしまった。しかし、装飾のおかげである程度緩和されており、逆に魅力を引き立てるようだった。花をモチーフにされているようで、所々にレースであしらった花があった。

『綺麗』――――その一言に尽きるものだった。

テイラーさんに御礼を述べ、早々に着替え始めた。舞踏会までの時間があまりなかったからだ。申し訳なかったが、彼は気にすることもなく、部屋を退室していった。今度、改めて御礼を言いに行こうと心底思った。

そんなことを思っている間にも、準備は着々と進んで行った。何人かの侍女にあれこれ言われながらの作業だった。

コルセットをいつも以上に締め付けられた。「うっ…」と思わず声を漏らしてしまったが、侍女の一人は「我慢してくださいまし。」と澄ました顔で言われた。少し酷いと思ったが、他の人もこれぐらいしているのだろう。そう自分に言い聞かせた。

腰が細いのは、いい女の条件だとネピィオ先生が言っていた。我慢しよう。そうしているうちに、ドレスを着る準備が出来上がった。

侍女たちは一つ一つの動作を丁寧にしてくれた。ドレスを着た私が、鏡に写っている。その姿は、あまり似合っていないように見え、またドレスに着させられているように見えた。落ち込む私を侍女たちは気にすることもなく、準備を先に進めて言った。

「では、髪を結いますね。」

「あ、うん。」

普段はただ流しているだけの髪は、フィリアに結われていった。結われただけなのに鏡に写った自分が、ほんの少しだけ綺麗になれた気がした。次にナジャが、化粧道具を持って待ち構えていた。これには、驚いた。だって彼女は、今日は朝から見かけていなかったからだ。違う仕事をしていたと思ったのに。

「失礼します、ラヴェリア様。」

「……ええ。」

――――重く、感じた。

ナジャは、そんなことを気にしている様子もなく、私の頬に触れて化粧を施していった。化粧の邪魔になると思ったのだろう、フィリアを含む他の侍女たちは次々と後片付けをするために私たちの周りから離れていった。周りから人の気配が消えていくことで、私の心も比例するかのように重くなっていった。

彼女と私の間には、沈黙しかなかった。実際にはそんなにも長くはなかったのだろう。しかし、私には永遠に続くような長い長い沈黙だった。ふと鏡を覗くと、いつもとは違った自分が移った。ちょうど彼女が紅色のクリームが入った容器を持っていた。ちょうど唇に紅を塗るらしい。彼女は今まで下げていた視線を上げ、私と同様に鏡を覗いた。鏡の中で目線が合うと、少し驚いたような表情をした。それに釣られて私も少したじろいだ。そして、また空気が重くなった。

鏡の中では私と彼女は合わさったままだ。私はどうしていいか分からず、呆然と目を合わせたままだった。そんな私の様子に呆れているのか、それとも興味はないのか分からないが、彼女は少し眉を顰めて、キッと鏡の中で私を見ていた。・・・・・怒らせてしまったのか。私がそう思っていると、彼女の手が離れていった。終わったのだろうかと思い、鏡の中の自分を見てみると、まだまだ淑女とは言い難い野暮ったい小娘が写っていた。仕事は最後までやり遂げる彼女がどうしたのだろうか。

「ナジャ？」

「……さい。」

「えっ…どうし「勝ちなさいよ。」

———勝ちなさい。

どう思って言ったかは分からない。しかし、鏡を通して見た彼女の目は真剣だった。日頃は貴族ではないここではただの平民である私を拒絶していた彼女が、応援をしてくれた。自惚れてもいいのだろうか。これは彼女が私との約束を守ってくれるという意味ではないか、と。

「言ったからには守りなさいよ。じゃないと私は許さないから。」

「ナジャ」

「……何よ？」

「ありがとう。」

お礼を言った私からの視線を逸らし、誤魔化すかのように彼女は、何も言わずに道具へと視線を向けた。私の見間違いではなければ、その頬はほんのり赤みがかかっていた。

初めて、彼女の心に触れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0625r/

プラトニック・ラブ

2011年7月12日13時30分発行